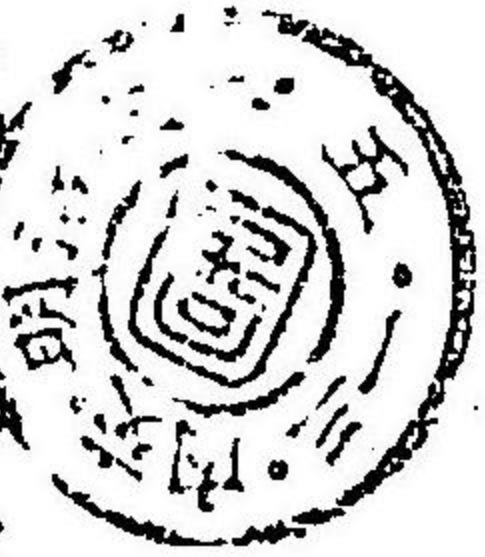


# 名家文話自序



言語者心情之聲。而文章者言語之影也。由影察聲。由聲察心。烏有不可求之理耶。文章因體異名。若詩賦。若和歌俳諧。均是文章耳。既有文章。豈可無話哉。所謂文話歌話。世不乏其書。然言或過高。不便於初學。因就專門諸名家親聞其話。隨聞隨錄。務取其易解。不避俚言。



俗語。心情之聲。言語之影。於是乎可得而求焉。蹊徑一開。可以上堂入室。由此而進焉。行遠傳久。泣鬼神而動天地者。亦不難矣。豈特筌蹄階梯云乎哉。

明治參拾貳年壹月壹日味爽識。時曉  
月如雪。朔風怒號。

隍南逸人 内田鐵三郎

### 緒言

西洋人の日本を稱する、其の名一ならず、英人は「ジャッパン」と云ひ、佛人は「ジヤッポン」と云ふ、予は明治二十三年、國會開設前、聊か感ずる所あり、諷諭的に私に「ジヨボン」と稱して、如益島と云ふ一書を著はせり、「ジヨボン」は如益なり、其の音「ジャッパン」「ジヤッポン」と相類するのみならず、日本國が四十年前までは、自國を閉鎖して外國と通交せず、船舶には龍骨を置く可らず、二本以上の櫓を作る可らずとの制限を置き、内國人の外國に至るを得ざるは論勿きのみ、外國船は僅かに支那和蘭の御朱印船が、特に長崎の一港を限りて、碇泊を許容されしの外は、一切内國に入ることを許されざりしは、猶ほ益の四邊に縁有りて、外物を入れざるが如きの觀有るを以て、音讀並に意味の双方より取て、以て如益島とは假定せしなり、(書中には國會開設の前に當りて、聊か一世を諷諭警誡せんと欲するの微衷より、政治經濟法律の一斑を擧げて、行政機關の伸縮に説及びしが、これをも書林の都合によりて、僅



かに其の一部分を出版せしのみ)

嘉永安政の間、外艦數々來りて、一國の牖戸たる、港灣より文明の光輝を放入せしより、視る者をして唇端を翻へさしめ、聽く者をして耳朶を傾けしめたりき、尋て條約成り、港灣開け、慶應の争亂起り、維新の更始成り、兵戰既に息み、法制稍く定り、民氣茲に蘇し、國運丕に興り、天清く地寧く、六合一家の若し、是に於て、舊を去て新を逐ふの流行は風馳電奔、一代の名工が精神を凝らし、後人をして其の雕刻する所の、鬼斧神鑿に異驚感嘆せしむる、神社佛閣の如き建築をも、破壊せんとするに至る、其言に云く、有用の地をして狐狸畫舞ひ、鬼燐宵發し、悲風脩然人を襲ふの、落莫無用地たらしむべからずと、又名區勝地を以て稱せらるゝ、秀靈の地、清閑の境をも、開墾せんとするに至る、其言に云く、勝絶の境、佳は則ち誠に佳なり、然りと雖ども、山水後先を襟帶にし、草樹遐邇を粧點し、汪洋浩渺なるも、隱見出沒なるも、嫵媚嬋妍なるも、晦明吞吐なるも、精華を延攬し、爽氣を領納するも、事に於て益なし、無用の長物安んぞ論するに足らん哉と、其他國粹をも美術をも、一掃せんとする

の勢ありしを以て、餘波の及ぶ所、所謂東洋文學なるものは、萎靡振はず、和漢の書籍は架上の塵中に堆積し、國學者漢學者は拱手爲す所なく、徒らに桑滄の變を洪嘆するのみ、凡そ小國短人は、狹量小膽なるを免れざるが故に、其の熱中するや、前後の事を忘れて進み、其の齟齬するや、九仞の功を棄て、去る、振往放來者の多さに觀て、見るべきなり、既にして文明の利器たる汽車汽船の工成り、電信郵便の制出でしより、文明の光輝は益々至る處に傳播し、洋書は文明の學と稱せられて、体裁能く書肆の店頭に陳列せられ、洋學者は開化人と稱せられて、威勢能く街路を横行す、其の勢斯の如し、而して物窮まれば必ず變ず、變するの極は始めに復る、猶ほ旦昏晝夜の循環窮まりなきが如し、是に於てや國學漢學復た興り、洋人且つ和歌を詠するもの有るに至れり、時運の變遷洵に斯の如し、烏んぞ恠しむに足らんや、夫れ羅馬の勃興するや、歐洲大陸に蜂巢の如く、散布割據する所の大小侯伯を席卷囊括して、古來屈指の一大邦國を成せり、而して政治、文學、宗教、美術、風俗、習慣、其他一切の事、皆な網羅拾撫して洩さず、其の英を摘み、其の美を茹ふ、盛ん



りと謂ふべし、而して其の尤なるものを、「オーガスタス」帝の治世と爲す、降て三百九十五年に至り、羅馬の東西に分岐せしより、勢漸漬衰退に傾き、四百七十六年西先つ踏れて、千四百五十三年東亦た覆滅するや、大國の土崩は分裂して、現今の歐洲諸國となれり、而して諸國の制度文物は、皆な羅馬より取て以て之を自國化せしものなり、是に由て之を觀れば、羅馬は一大湖水なり、羅馬以前諸國の文物制度は、皆な散漫流れて羅馬湖に入り、羅馬以後諸國の文物制度は、悉く溢れて羅馬湖より出でしものなり、我徳川氏の如きも亦然り、元龜天正以來、海内鼎沸して、乾綱紐を解くこと久し、家康に至つて、政治、宗教、文學、悉く一新、大に其の面目を改むるに至れり、繼承殆んど三百年弱、而して明治中興の基礎となれり、然らば則徳川は一大川にして、徳川以前徳川なく、徳川以後徳川なし、徳川以前の文物制度は、悉く徳川に入り、徳川以後の文物制度は、悉く徳川より出づ、蓋し徳川は川の最大最深なるものなり、徳川時代の隆盛寔に是の如し、而して世人舊を捨て新に就くの急なる、動もすれば之を顧みるもの有るなし、慨嘆に勝ふべけんや、今や之を内にしては、内地雜居の舉あり、之を外にしては、世界の人民と共に相提携し、十九世紀の舊天地を見捨て、二十世紀の新舞臺に踊入るべき時期は到來せり、寔に内外多事の時と謂ふ可きなり

二十世紀の彼岸に達すべき此の時期は、僅かに十數ヶ月を餘すのみ、此の十數ヶ月は、實に吾人が彼岸に到達すべき橋梁なり、船舶なり、予は十九世紀の一老書生なるがゆゑに、經歷上、兩世紀文學の媒介者となり、十九世紀の諸名家文話を懐にして、橋梁に上り、船舶に乗り、以て二十世紀の彼岸に達し、新舞臺の新書生に、新土産として之を呈出せんと欲するなり、

此の文詩歌話は、皆な一代の名家なれども、各家學藝の緒餘たるに過ぎざるなり、然れども、片鱗隻羽、亦た以て龍鳳の美を知るに足れり、即し少瑕有るも、亦豈に此を以て、各家を累すに足らんや、况んや筆録、帝虎の誤なきに非ざるに於てをや、此編雅俗共に收拾し、華實並に採撫す、故に大小互に出て、姿態相照す、異色の濃淡なるもの、奇趣の深淺なるもの、沓然歴然應接に違わらず、双目爲めに迷ひ、十指爲めに戦き、恍として夢の如きものあり、今や學海渺茫、各々壘を堅ふし旗を掲げて相



對す、書生權を抱て嘆息し向ふ所に迷ふ、是れに由て其の津涯を知り、其の流に遡廻せば、其の泉源求むべきなり、

夫れ感は心に生じて、而して聲は言に發す、言語は心情の聲にして、詩歌文章は言語の影なり、其至れるものは、以て人心を移易すべく、以て鬼神を涕泣せしむべく、以て天地を感動せしむべく、以て千萬里の遠きに達すべく、以て千萬年の久しきに傳ふべし、若くは詩、若くは賦、均しく是れ文章のみ、若くは和歌、若くは俳諧、亦是れ文章のみ、古人云、「文章經國大業、不朽盛事」と豈に信ならずや、

所謂詩歌文章は、皆吾の一心に出づ、特に事に因て感觸して而して成るものにして、智力の能く増損する所に非ざるなり、古の人其初め沿襲する所有りといへども、未復た自ら一家言を成すのみ、近來學者類ね自ら高ぶり、操觚未だ章を成す能はずして、輒ち前古を濶視し、以て祖襲依倣するに足らずとなし、動もすれば則ち揚言して曰、諸作佳と雖ども、必ずしも師とするに足らず、吾即師、吾が心を師とせんのみ、詩文は畢竟吾が心を寫すに過ぎざるのみと、故に其の作る所のもの、高さもの虚遠に涉

り、卑さもの淺陋に安んず、往々猖狂にして倫なく、揚沙走石を以て豪と爲して、而してまた純和冲粹の意あるを知らず、慨するに勝ふべけんや、故を以て之を學ぶものは、必ず歸宿祖襲なかるべからず、而して其上なるものは、其意を師とす、辭固より似ず、而して氣象同じからざるはなし、其下なるものは、其辭を師とす、辭は則ち似たり、其精神の寓する所を求むれば、固より未だ嘗て近からざるなり、

此に由て之を觀れば、諸家各々其の体裁、骨格、識趣、音調を異にするは、勢の免れざる所なり、其の清婉なるもの、深刻なるもの、宏麗なるもの、敷腹なるもの、聲韻に拘はるもの、編迫に局するもの、摹擬に過ぐるもの、淺易に涉るもの、瑣碎に流るもの、輕俗に近きもの、其情沈而鬱なるもの、其辭蕪以麗なるもの、其制澁而乖なるもの、其識卑以陋なるもの、其發滯而拘なるもの、新意を出して而して恠詭に涉るもの、古格を離れて而して靡蔓に誇るもの、波瀾富んで而して句律疎なるもの、鍛鍊精而して情性遠きもの、刻鏤に傷れて而して雄渾の氣に乏しきもの、天分の高さ氣骨淵然、而して掀雷抉電の勢有るもの、其格極めて高く、其變化神龍の羈すべからざるが若



きもの、上は古代に薄り、下は近代を該ね、才諸家を奪ひ、氣一世を呑み、孤高を守て、流麗を雜へ、眞に所謂集大成するもの等、旁引曲證すれば、壘々數百言を重ねべし、

古の人以て一世の名を擅にする所以のものは、其格律同じからざる有り、聲調齊しからざる有りと雖ども、要之、各古今に雜參して、鑽研考覈功を用うる既に深く、其精神を求めて、而して得る所有るに由るなり、故を以て學者淬礪懈らず、攻習用力の久しき、稽古の功を加へ、諸家の音節體製を審らかにすれば、或は超然悟入する所有らん、規矩既に手に在れば、方圓固より自在なり、渾々乎として大も包まざる所なく、小も遺す所なく、簡古にして麗蔓に走らざるもの、豐腴にして叢冗に流れざるもの、雄峭にして粗厲に失はざるもの、清圓にして浮巧に涉らざるもの、委蛇にして細碎に病ざるもの、温醇にして典則有るもの、飄逸にして思致あるもの、絢爛星斗の如きもの、流峙河嶽の如きもの、今に信せられて、後に垂るもの、亦決して難しとせず、夫れ歐の豐艶、曾の典質、王の奇峭、天下皆之を宗とす、歐を學んで至らず、其失や纖

以弱なるも、曾を學んで至らず、其失や緩而弛なるも、王を學んで至らず、其失や枯以瘠なるも、三家の過に非ざるなり、善く之を學ばずして、其弊遂に斯に至るなり、然りと雖ども、亦一代の作家たるを失はざるべし、

杜氏は穎悟絶特の資有て、而して濟ふに該博宏偉の學を以てし、古今天人の變を察して、而して洪纖動植の情に通ず、杜氏以前杜氏なく、杜氏以後杜氏なし、杜氏以前の詩脈は流れて杜湖に入り、杜氏以後の詩脈は溢れて杜湖より出づ、所謂集大成は此人にあらずして、而して誰乎、譬へば八面玲瓏の高山なり、山に在りて山を見れば、其大而美を知る能はずと雖ども、山を距ること彌々遠くして、其彌々大且美を知るべし、唐人杜才の大且美此の如くなるを知らずして、後人益す其大且美を知り、捷聘橫騫、仰て而して望み、俯して以て學ぶ、而して其一才に局し、一藝に滯するを免れざるは、蓋し其一面を仰て摸倣せし所以なり、

李氏は天分の高さ、力、風霆を驅り、氣、鬼神を叱す、其詩凌厲頓迅、沈冥發舒、所謂緩急豐約、隱顯出沒、皆繩尺に中る、蓋し一氣貫通の然らしむる所なり、譬へば神龍



の見るべく而して羈すべからざるが如し、

二條冷泉二家が和歌の特權を握ること久し、猶ほ洪濤怒漲して流に逆ふて上る能はざるが如く、他人復た一言之れに論及するものあらざりしに、元祿年間圓珠庵契冲師挺拔特立の資、脱俗緇衣の身を以て、高蹈勇進、古學に據りて其謬戾を訂し、繼で荷田東磨、加茂真淵、本居宣長等諸大人輩出し、鉤幽剔微以て習俗の陋を二洗せり、其勢青天白日、虚雷轟て而して紫電閃發し、昇平天下武庫開て而して五兵森列するが如し、歌人始めは畏懼して、耳を蔽ひ目を閉ぢ、中ごろ半は疑ひ半は信し、終りに手舞足蹈競ふて之れに摹倣せり、是に於てや歌海清新、千里一碧、以て今日あるを致せり、四瀛渺邈たるも、舟帆以て航すべく、五洲邦國蟻雜蜂屯するも、文字以て通すべし、然りと雖ども、國其俗を異にし、州其語を殊にするは、猶ほ群芳其色を匂ふせず、衆禽其聲を一にせざるが如し、文字以て之を通せんと欲する、亦難からずや、夫れ歐洲諸國の語源は實に羅甸ロヂンに在り、故に其の源に遡廻して、其形を覘ひ、其貌を睥ひ、而後其幽を鉤し、其玄を探り、其隱を索め、其微を剔り、其肺肝を盡し、其蘊奧を究むれば、則纖微を洞察し、首を揚げて尾を知り、白を問ふて緇を意ふの妙有らん、矧んや對譯書有り、孜孜矻矻攻習久しきに涉れば、數個國人と談話する、亦難からざるべし、東西併觀、彼此對照以て新機軸を出すは、之を新世紀の新書生に望まざる可からず、

二十世紀の新舞臺は、縦ひ有形上山河の區畫と、無形上國法の制限とは有るも、世界一境、四海兄弟、白、黄、黒、煤、銅色人種雜居の天地なり、長軀、短身、黒髮、紅毛、綠眼、褐目、圓顛、蓬頭、辮髮、椎髻、並行同坐の乾坤なり横行左讀の文字は豎行右讀の章句を侵蝕すべく、言文一致の學は、無形の意思を虚構裝飾する、繁文冗語の學を壓抑すべく、恠聲互發、異言交出、言者をして搖目以て之を報し、舉手以て之を示し、聽者をして耳窓混蔽し、心鏡膠擾するの憂無からしめんが爲め、高加索カフカサス人種の普通語を借來て、通用語と爲すべく、同時に羅甸ロヂン語は漢儒の聖經に於けるが如く、操觚者間に流行するの期有るべし、斯の世紀に當つて、實に文學社會に一大旗幟を樹て流俗の移易する所と爲らず、或は革、或は因、舊套に泥まず、新様に馳せず、



以て恰好的に作新するの一大手腕家を要するなり、而して斯の手腕家は膽、天地を呑み、氣、一世を蓋ひ、一言以て天下を動かし、一筆以て後世に垂るの人たらざるべからず、

嗚呼十九世紀以前の作者は、吾以て其人を知る、二十世紀以後興る者、敢て其人無しと謂はんや、若夫れ二十世紀の新書生にして、此新土産によりて、新思想を起し、向ふ所を撰擇し、花實を兼拾し、以て文明の新舞臺に新機軸を開くことを期せん耶、則予が媒介豈に泡影に歸せんや、而して徳川時代斯文の隆盛復庶幾すべきなり

明治三十一年十二月三十日五更玻璃窓下に書す、

時に月華霜を照し、風刀肌を刺す、

編者 隍南逸人 内田鐵三郎識

## 凡例

- 一 編中網羅すべき、大家名家の文詩歌話は、實に積んで山の如し、今一時に刊行すること敢て難きにあらずと雖ども、巻帙の大小と、紙數の多少とに至りては、書院の都合もあれば、後着の原稿は、残念ながら、割愛して第二編に編入すべし、
- 一 編中文詩歌話は、原稿到着順序を以て編入し、また更にイロハ順を以て次第を立つ、敢て私意を以て軒輊せしにあらざるなり、
- 一 編中文詩歌話は、皆な各々其が範圍の大体に就て申ししものと、其が一部分に就て申ししものと有り、故に同一の人にして、其が一部分を掲ぐることも之れあるべく、同一の話にして、一段落づゝ區分して掲載することも之れ有るべし、讀者請ふ之を諒せよ、
- 一 一家の話にして、數篇に跨るもの有り、一片の話にして、他話に關係するもの有るを以て、彼此相應し、精粗相補ひ、巨細互に接し、長短互に交はる、是故に一篇を讀むものは他篇を讀まざれば、また其の眞味を知ること能はざるべし、



一 大家名家の文詩歌話にして。未だ淨書せざるもの、及び談話聽取の約束既に成て。未だ重ねて訪問せざるもの、當さに訪問すべくして。未だ訪問せざるものあり。故に次篇より益す多く名論卓説を掲載すべし。

一 我邦第一流の詩宗として。詩學社會に仰がる。某老先生は、梁川星巖。頼山陽等の生存中。親しく談話せられし人なれば。詩話の外。山陽。星巖の逸話など聽取りて。第一篇に掲載せんと欲し。先生は八十餘歳の高齢なれば。大寒中の面會も氣の毒に思ひ。差控居たる義なれば。いづれ永日暄和の節を俟て。緩々聽取り。これを後篇に掲載すべし。

一 方今學海渺茫。諸校各々城壘を堅ふし。旗幟を掲げて相對す。書生帙を抱て嘆息し。向ふ所に迷ふ。此編に由て其が一斑を知り。其の津涯を求めて。其の流域に遡り。其の泉源を窮めて。得る所有れば。則ち幸甚。

一 情。物に感じて。言に發するを聲となす。文詩歌は聲の成文なり。讀者宜しく諸家の卓説名論に鑑み。其の精金碎玉。華實異彩を拾撫して。深く自ら量度し。多

く讀み多く窮むれば。則ち玲瓏透徹の妙處に到達すること。決して難きにあらず。

一 感は心に生じて。聲は言に發す。言語は心の聲なり。文章は言語の形なり。詩歌文章の至れるものは。其の効能く鬼神を泣かしめ。天地を感動せしめ。千万里外の異域にも行はれ。千萬年後の末代にも傳はるべし。讀者之れに據りて。得る所あれば。則ち撼天動地の傑作。泣鬼感神の妙文。亦た難きにあらず。今や四海兄弟。世界一境。たゞひ語言文章に差別あるも。彼我相譯して。以て之を玩味すること。實に易々たるのみ。是故に其妙文傑作の。千山万岳を超えて。遠く異邦に行はれ。百世千代を隔て。長く後人に傳ふること。決して難きにあらず。

一 文詩歌中。玲瓏透徹の妙處は。猶は鏡中の像。水中の月。空中の音の如し。目之を睹るべく。耳之を聽くべくして。而して手之を採るべからず。人々此の篇に據りて。向ふ所を定め。潛心努力以て逕より庭に入り。堂に上り室に入るを得ば。則ち實に編者の幸なり。

一 苟くも文學に關するものは。細大漏さず網羅して。以て世人の便益を裨補せんと



欲するがゆゑに。詩歌文章は勿論。泰西諸學科、印度哲學より發句、俳諧、謠曲、新聞、雜誌、文の類に至るまで各名家を訪問して。其高論卓説を掲載し。世人をして其の蹊徑の存する處を。知らしめんと欲するなり。

明治三十二年一月二日

編者 隍南逸人 内田鐵三郎識

# 名家文話 第一編

## 目次

(姓名ハいろは順序ニヨル、其ノ同音ノ姓ハ更ニ訪問順序ヲ以テ次第ス)

芳賀矢一大人國文話	一
萩野由之大人國文話	九
本田幸之助先生詩話	十一
龜谷行老先生詩話	二十五
蒲生重章老先生漢文話	三十二
内田周平先生漢文話	四十
野口式太郎先生詩話	五十四
日下寛先生漢文話	八十四
佐々木信綱大人歌話	八十九



木村正辭老大人歌話……………九十五

重野安繹老先生漢文話……………百十二

本居豐頴老大人歌話……………百十六

# 名家文話 第一編

隍南 内田鐵三郎輯

## 芳賀矢一大人國文話

大人名は矢一號隍江。別號不欲遺齋主人。越前福井人。當時本郷區根津宮永町三十五番地居住

國文に就いての話と申しましても、範圍が誠に廣うございますが、先づ中學校などの國語科を中心として、心附いた事柄を御話致しませう、

教育の上に國語の大切なる事は、今更いふまでも有りません。この國でも、自國の語學文學を諸學科の一ばん大切なものとして、教育の中樞となるやうに仕組んで有ります。我國でも近年各學校に國語科を置かれましたは、誠に結構な事でございませう、併しながら、この國語科の目的が、充分に達せられて居るかどう云ふ疑問になりませう、少しく首を傾げねばなりません、

國語其のものゝ性質から申しまして、誠に残念な事は、國語には材料の乏しい事で



有ります、今多くの學校で用ひて居る讀本を見ますに、徳川時代では新井白石、室鳩巢、貝原益軒、橋南齋等の文章、遡つては太平記、源平盛衰記、大鏡、土佐日記、等の文章を、彼是斟酌して拔萃したものでありますが、これ等は要するに、記事文、叙事文に過ぎないので、國文には論説めきた文章の甚だ乏しい事は、誠に残念な次第であります、それ故澤山な時間を費して、教へたり、習つたりしたところが、つまり大体は習はぬ前から分つて居るので、新しく覚えるものは、器物とか、衣服とか、故事の出處とか、儀式の順序とか位のもので、之れによつて智力を増し、論理力を上達させるといふやうな方面は、少いので有ります、之から見ると、漢文の方には中々理の積んだものもあり、思想の深いものが多くございます、語學の教授は、思想の鍊磨といふのが重要な目的で有りますのに、この方の利益は、今日の國語科の上からは一向得られないやうに思ひます、勿論これは教へ方の方法の拙いのが、儘に一原因には相違有りませぬが、國文其者の性質にもよる事でありませぬ、それ故何年やつても同じ事で、教へる人も張合がないし、習ふ人もつまらない、こんな風で、國語科は大切だといつて威張れませうか、私の考では、國文學史の上に産物の少いのは、先づやむことを得ない事として、今日の讀本は、まだ材料を豊富にし、思想もあるやうにする事が出来ると思ひます、今の讀本の採方は、唯文章に疵のない、材料も極く限られて居るので、國文學のはんの一部を取つたものであります、もう少し範圍を押し擴めて、謠曲でも、發句でも、小説でも、乃至は淨瑠璃でも、教育上に害のない限りは、取らねばなりません、中古のある一時代を模範として居る中は、文學もそれより上へは進ませぬ、せめてあらゆる時代の標本だけは讀ませて、其の趣味を養ふ事が肝要です、又斯うすれば、國語に材料が足りないといふ事も、幾分か救はれます、少しの文法上の誤謬などは、頓着するには及びませぬ、發句などの意味深長なものは歌などよりも餘程面白いものがあります、處が今の讀本には、歌もなければ、發句もない、佛敎者の書いたものなども、厭世的とか、何とかいつて取らぬが、これも不都合です、日本人の思想を、千年以上支配したのは佛敎です、その元素を含んだ文學を捨てれば、文學の貧しく成るのも、



當り前でござりませう、兎に角國文學は、外のものよりも材料が少ないのを、更にそれを少くして居るのは、誠にその趣意が分りませぬ、日本文學の全体にわたつて、廣く探るのが第一に必要であります、そこで私の考では、日本人の書いた漢文などは、國文として取らねばならぬと、おもひます、或物は國文に書直しても、宜しく御坐いませう、そうして中學校に於ては、一切漢文の授業を廢して、仕舞ひ、漢學の研究は、高等學校以上の學者の仕事にまかせたら宜からうと思ひます、中學校生徒、即ち國民の普通智識を養ふに、漢文として讀む必要は、今日とんどないかとおもひます、私は學問としては、飽まで漢文の研究を必要とするものであります、中學校に於ては漢文の必要なる部分は、すつかり國語といふ名目の下に入れてよいしいとおもひます、今日の處では、漢文の授業は、むしろ國文の授業の邪魔になるばかりで、利益は有りませぬ、この事に就いては、大分議論もありませんし、私にも説がありますが、唯今述べますまい、

教へ方に就いて、私の第一に不服に思ひますのは、前に陳べた事と重複するやうですが、國語を教へるに、實際の應用に注意する事が、少いかと掛念するのであります、小學校の讀本からはじめ、言語を主とししないで、文章に這入りますゆゑ、中學校にては益すく其風に流れる、自分の思想はありながら、文章には書けぬ、話をする事が出来るが、文章に書けぬといふ事が澤山あります、かういふ蘆梅では國語教授の目的に外れて居るは勿論、學問の進歩も出来ませぬ、我々の理想とする處は、言文一致にあります、それは當分むづかしいとしても、成るべく其方に近づきたいのであります、普通の人の用事を足すには、言文一致で充分で有ります、話をして用を足す、電話で用を足すに、文章語を用いた例はありません、それを普通教育には、是非文章を學ばねばならぬといふのも、つまらぬ話であります、この考を基礎として、文章を書くにも、成るべく形式に拘束せられない様にし、言葉通りを書くこといすれば、文章は餘程自由になります、強ひて文章語を用ひやうとするゆゑ、却つてむづかしい文章が出来、意到つて筆隨はずと云ふやうな事が起るのであります、文法上の誤謬なども、言葉通りに書く事として、言文の差だけを正せば、立派に出



来るのを、言葉と離れて文を書きますゆゑ、意外の間違を生じます、何でも言葉通りに自由に思ふ事を書くといふが、第一でございます、小學校の時分から、即ち言葉も碌々に言はれない時分から、文章の形式でおさへつけますから、文章と云ふものは、むづかしいものと考え、むづかしい言葉を使はなければ、文章にはならぬ、と云ふ風に考へるので、これが最も悪い風とおもひます、文章の極意は、意味の徹底する事です、美文の上の事などは、小學校や又中學校などでも言つて居る暇はありません、今日の中學校卒業生の中に十分に自分の思想を言顯はすことの出来るものは、どの位有りませうか、教へる人も、習ふ人も、この點に充分の注意をする事が必要かとおもひます、中學校の語學教授は、讀むと云ふこと、書くといふ事の二つが大切です、國文の教授といふ事を、唯だ古いものを讀ませる事だと考へて居るのは、大それた間違です、作文の教授に骨を折るべきは勿論、國語科は諸學科の第一にあるもので、諸學科の根柢となり、中心となるものと考えねばなりません、それ故國語の教員たる人は、中學校位の學科は大抵心得て居り、色々な學科を、甘く國

文と關聯せしめねばなりません、處が國語の教員といへば、唯だ少しばかり、源氏や枕草子を讀む事が出来る人で、學校中で一番物の分らぬ人が勤めて居り、生徒も従つて國語教員を輕んずる様な弊はありはせぬかとおもひます、これは漢文の方も先づ同様で、詰り一週六時間の授業が多過ぎるといつて、持て餘したと云ふ様な話も聞いて居ります、そんな風では、規則ばかり立派でも何にもなりません、作文を教へるにも、文法を教へるにも、外國語と關聯せしめる事が、中にも大切でございませう、中學校で申せば、英語讀本などの中から、翻譯をさせたり、又は英語の文法と比較して教へたりすれば、兩方とも正確に覺ゆる上に語學教授の上の、色々な目的が達せられます、私はこれからの國語教員たる人は、外國語を知つた人である事を希望しますし、又英語其他の學科の教員も、國文學、文法の趣味を多少持たれるのを希望致します、

こんな事を申せば、いくら言つても盡きませぬから、先づこの位の事で止めさせうが、最後に一寸希望の一つを述べておきますのは、中學校あたりの時代には、學校



の餘暇に種々な書物の輪講會や、作文會などを起すことを獎勵せられたいと思ふのであります、學校だけて讀む本は、五年中一週六時間では高の知れたものであります、作る文章の數も、僅かなものでございます、それですから、教師の方より相當な讀本を指示して、生徒の自宅での勉強を獎勵せられたら宜からうとおもひます、それは有害で無い限りは、あまり堅苦しいものばかりにも限りませぬ、又文章を作る會を起させて、文章を作る事に興味をもつ様にするのも、大切な事と考へます、朋友がより集つて、互に文章を評し合ふやうになれば、その位文章の進歩に功能があるか知れませんが、この方は學校と違ひ、私の事ですから、歌でも、發句でも、何でも、構ひません、これを利用して、文學趣味を發達させ、作文の力を養つたら宜からうと思ひます、中學校の國語に關するお話は、先づこれだけに致して置きます、(明治卅一月十月八日談話)



### 萩野由之大人國文話

大人名由之。號草秋。佐渡人。當時本郷區千駄。林町五番地居住。

和文を學ぶのには、是非先づ文法と云ふか、語法と云ふか、私共は語法と思ふが、之を能く知らねばなりません、之を知らふと思ふと、師匠取りをして、手ほどきをして貰はぬと、一寸這入りにくい、師匠取りをして手ほどきも相済み、東西南北も荒増し相分る様になつて、而後獨り稽古するのなら宜しい、又文法の研究には、大槻文彦さんの廣日本文典があります、これは本文許りの分と少し委しく書いたものと、更らに委しく解釋したものと、都合三通ありますが、かう三通あるのは、生徒用、教員用の爲です、文法書も澤山出來て居るが、これが私の知てるのでは、まづ便宜と考へます

和文を學ぶのにも、漢學力があると餘程違ひます易々と進みます、先づ當今讀み初めに、書物は矢張り世間に澤山あつて、其の註釋も出來てゐる書籍で申すと、神皇正統記、徒然草などが宜しい、其れから三鏡、源平盛衰記、平家物語、保元物語、太平記、源氏物語などが宜しい、盛衰記、太平記などは面白く書いてあるが、事實



十  
ばかりではない、潤澤も有る、お負もある、サアと云ふと、支那の事や、佛法の事が引いてある、是れは當時他に記載すべき材料が、なかつたからかど云ふと、そう云ふ理由でもない、當時の作者は勿論、堂上方を始め、一般上流の人、學者僧侶に至るまで、悉くみな支那學と佛法とは、併せて研究したものです、だからなにか引證するとか、潤色するとか、云ふときには、必ず支那學や、佛法の事を引來つて、大變に書き立てる、サアそうすると、大そう面白くなる、面白くなれば、人が珍重する、人が珍重すれば、讀んで呉れる、讀んで呉れば、自分の書たものが弘まる、わけなれば、其の邊で、やつたものと見へる、

太平記の事實ですか……それは太平記に限りませぬ、何の書物がよいと申しても、それが皆な悪いわけでも有りませぬから、要するに眞偽を分別して、英を摘み美を茹ふべきのみです、サテ其の和文を研究するには漢の故事や佛語の外に、古代の裝束甲冑等の研究が必要です、是れには關根さんの裝束甲冑圖解と云ふ本がある、こ

それは六合館で出版致しました、源に遡れば澤山本もあるが、一寸和學に便利なのはそれでしょう

和歌の讀み初めには、漢詩を作ると同じやうに、漢詩の語碎金や、幼學便覽のやうなどが出來て居て、五字句、七字句と區別して、入用の句が並べて有るから、これを程能く上手に並べたものが、つまり上手のです、よるき時代から用ゐ來た分では、和歌梯、和歌ふるの山踏、和歌うひまなび、などが宜しいかと思ひます、しかし私は歌はよみませぬから、まあ門外漢です、



### 本田種竹先生詩話

先生名秀。字實卿。號種竹。通稱幸之助。阿波德島人。當時下谷區上根岸百七十七番地居住。

詩の話と云ふと、随分廣い問題で、一朝一夕には、御咄が出來ぬが、此雪後の寒天に、遠方態々此の根岸まで、御出掛成すつた事ですから、歳末多端の際では有りませんが、一寸簡短ながら、御咄致すことにしませう、扱て詩家の詩を作ることに付



て、最と肝要だと思ふ、一二點を擧げて、申上ぐる事に致しませうが、全體詩を作るには、第一韻字や平仄を能く調べて、能く記憶することの必要なのは勿論ですが、兎角我邦の詩家は、初學者は勿論、相應に出来る人も、又は作家の名ある人までもが、始終重みに韻書にのみ依頼して、低きは詩韻舎英の類より、追々進んで佩文韻府とか、五車韻瑞類を金の鷹のやうに思ひ、極めて尊重し、又は淵涵類函とか、子史精華とかの類書を、帖中の秘書として、故事故典を搜索使用する、材料に供すること力をめとして居るので有ります、又一方を顧みれば、四書六經は申すに及ばず、漢魏以上の古書を講じ、若くは宋儒等の學說を奉じ、經史を研究する學者連も有りました、別段深く専ら詩道の考査もせないで、學問上のもので字句をこねまはして、直ぐに詩に作ると云ふ連中も有ります、其處で私の考へには、前者の韻書類にのみ依頼する、詩家と、經史類でこねまはす詩家とは、是れ皆な詩道の精華と蘊奥とを、極むることを知らないので有ります、苟くも詩を作る以上は、古來よりして沿革もあれば流派も有り、所謂一代自から一代の風あり、一家自から一家の風が有

るものですから、廣く古今に涉り、深く醇醜を酌分けて、全哲の規矩を奉し、傍門邪逕に陥らぬ様にするのが第一です、其處で詩を學ばんとするには、先づ試みに古大家の詩を讀めば、其の詩の品格は雄渾であるとか、冲澹であるとか、流麗であるとか、云ふが如き其の詩全體に就ての品格を見定むるとが、第一の必要であります、約言すれば、詩の品格と云ふは、字の句により凝集したる、全局面の純粹なる要點を指して謂ふ譯にて、則其詩の意味も、其使事も、總て此の要點中に包含するものなれば、要點即ち品格を見定めるとが、最大緊要なる所以であります、若し否らずして、此の句がらが好いとか、あの字の使ひ方が甘いとか、區々の間に心を注ぎ、全體の氣體も格度も一向分らなければ、實に皮相の觀たるを免れぬので有ります、其故に既に雄渾なり、冲澹なり、流麗なりと見定めたる以上、讀者其れ自身が、雄渾を好めは其の格體に倣ひ、又は流麗が好きなれば、流麗を學ぶ様にすれば、其の詩と、自己の性と相好み相近くものに向て、方針を取て進めば、唐、宋、逸、金、元、明、清、數代の間に、各々此種の詩風を善くする人に就き、自己の造詣を闢き、且つ



確かむるを得るは必然なりと考へます、更らに進んで申せば、其の詩の體裁、格力、氣象、興趣、音節、等總て能く玩味し、其れを以て自己の心志を涵養し、彌々久しきに及んでは、其の得る所は決して夫の韻書のみを倚賴する、比類では有りません、

併しながら古來詩の全集でも、撰本でも、其の數實に澤山なるもので、彼の曹學佺が編輯した、石倉十二代詩でもあれば、其の一部だけでも足りませんが、此の書物は、我邦では容易に得られません、其れで止むなく、其の時代々々、又は其の人々の各集に就て、讀み且つ研究する外は有りません、去れども、堯舜以來今の清朝までの間に、詩歌を作りたる人は、千萬も管ならぬ、程多きが其の中に、後世より規矩道奉して學ぶべき作家は、一代中指を數人に屈する位にて、既に古人にも定論ある人達ばかりだから、力めて其等の人の諸集を讀むのが必要で有ります、其れで先づ其の詩歌の集類を擧ぐれば、詩經、離騷は申すに及ばず、詩經の外に古逸詩と云ふが有ります、此れも一應讀まねばならぬものです、秦までは詩道は衰へましたが、漢以

來詩賦の道盛んに行はれ、殊に古詩十九首は、直に響を詩經三百篇に繼ぐと云ふ名作で有ります、又其の樂府類も學ぶべきものです、

魏の曹操父子一家に至り、詩道漸く盛んにして、此時の建安七子と稱する曹子建以下七人の作は、讀むべきものです、魏よりして、晋、宋、齊、梁、陳、隋、までの間に、陸機、左思、阮咸、劉琨、陶潛、謝靈運、顏延之、謝瞻、鮑照、謝朓、沈約、庾信、などは大家なり、名家なりで有ります、唐に至りては古今に勝ぐれ、尤も詩道の旺盛を極めたる時にて、其の作家として王、楊、盧、駱、の四傑を始め、陳子昂、宋之間、張九齡、杜甫、李白、王維、孟浩然、儲光儀、錢起、王昌齡、韋應物、劉長卿、白居易、柳宗元、韓愈、許渾、李商隱、杜牧などで、右の外作家と稱すべきもの、又學ぶべきもの、實に勝げて算ふべからざる程ありますが、先づ此等の人の諸集を、潛心精讀するが肝腎である、

何故に唐一代の間には、斯の如き大作家の相繼いで輩出したかと云ふと、唐朝にては詩を以て人を取ると云ふ制法なるが上に、歷朝の帝王が極めて文字を尊重したゆ



ある、殊に李杜の如きは、上下數千年間に、此の如き大手腕と大力量を有したるものはないのである、李杜以前に、漢魏六朝の作家の内にも、或一部分に付て云へば、李杜に勝りたるものもないではない、或は李杜以後にも、其れより巧みにして、且つ麗くしき詩を作つた人も有るが、これも或一部分にしか過ぎないのである、要するに李杜は所謂集めて大成したものである、就中杜子美は大成中の尤もなるもので有る、併しながら、杜子美なりとて、素養なくして、決して此の大成を得たものではない、李白に於ても亦た然りです、故に杜子美は、鮑照又は庾信の如き、古人の作を學んだのが原因となつて居る、李白の如きも、天才とは云へど、「一生低首謝宣城」と云ふ詩句の如く、謝宣城に頭が擧がらなくなつて、其れを本尊に崇め奉つて、一生の本領を上げたのである、李杜すら此の如きにも拘はらず、どうして今の人は、古人の詩を學ばないのであらうか、甚だ慨嘆に堪へません、話替て、宋朝の作家にして、學ぶべき人を擧げれば、宋の始めには錢、楊、など云ふ詩人あるも、單に晩唐の温、李の詩風のみを學びて、深かく窮はめませんから、

此れは取るに足らんとして、先づ首として數ふべきは、歐用修、梅聖俞、蘇軾、黃魯王、王安石、陸遊、朱熹の數家に過ぎません、全体宋では道學が専ら行はれ、殊に南宋に於ては、理學を専らにしたから、學問と文章とは、漢儒に較べても、劣らぬ位ですが、詩の方は比較的劣て居りますが、是れは學問から來た結果ばかりでは有りませむ、前代即ち唐朝の詩風に反對するが爲め、外に新機軸を出さうと云ふ考へから、風格にも、興趣にも、頓着しないで、命意と云ふことが一番の主眼になつて、各々其の新奇を競ひ、巧細を争ふやうになつたから、自然の妙味が、乏しくなつて、理窟に偏するやうになつて來た、是れは宋代の通弊と云つて差支ないので有ります、其故に唐に反して、宋詩の疎惡なるものを擧ぐれば、中々算へきれぬ程あるが、其の中に前に列舉した人達が、先づ殊に作家として、取るべく學ぶべきものである、序に此に朱熹の詩に就て、一言申して置き度きは、即ち學者の詩の事である、宋には周濂溪とか、程伊川とか、陸象山とか、邵康節など云ふ學者にして、詩を作る人が有るけれども、皆な其の詩は理窟に偏し



て居て、正則を得て居ない、昔から頭巾氣習、又は斗筋様子などを稱して、却て其の詩を鄙しめて有る、學者だから其の詩も必ず善いと限つたものではない、是れは既に古人にも定論があるのです、然るに朱熹の詩のみは風調あり、趣味ありて、確かに詩人調の詩が出来るから、此の人は一大作家として愧かしからぬのである、何故に然るかと云へば、朱熹は詩經から、以下六朝以下、唐までの詩を精しく調べて、明らかに純駁の筋道を弁へて、多く力を古人に獲たのが、厚く且つ至れる結果と云はんければならぬので有る、之れに反して、邵康節などの詩の拙作なるは、少しも詩の研究をして居らんからである、これを以て觀るも、到底詩は古人を學ぶのが、肝要であります、其れから遼金の間には、劉無黨、趙閑閑、辛敬之などの作手が有りますが、何うしても元遺山を第一人と推す外は有りませぬ、元になると唐以上の詩格を尊んだから、比較的宋朝よりは、優美なる作家が多いのです、特に元人は即ち蒙古人種であるから中國の言葉を一意専心に學ぶと云ふ風習が、有つた上に、取り分け古今に勝れた、唐人の風格を學んだもんだから、優美な譯なんです、而して

元の作家に至つては、劉因、虞集、楊載、范梈、揭傒斯、馮海粟、錢維善、王秋澗、柳貫、戴表元、耶律楚材、揚維禎、などで有ります、畢竟元朝では南宋の理學が流行せんで、蘇學即ち東坡流の學問が流行して、詞章を研究するやうになつたが、詩は宋朝よりは、一層進んで、唐時代の佳境に至るとを得たので有ります、此に列擧した諸作家の詩を讀んで、習ふことの價値は、充分あると信じます、扱又明朝に至つては、明の太宗が學問好きな帝王なるに、之れに加ふるに劉基と云ふ豪傑にして、詩の大作家を出したから、遂に三百年間右文の譽を残したのである、明の詩は全体元に較ぶれば、綺麗なる點は劣りますが、雄渾勁拔なる氣格に於ては、尤も前代の欠點を補ふに餘りあるものです、明朝には實に三千二百家の多さに至る程、旺盛を極めたものですから、各種の流派と好尚が、頗る錯雜を極めて居るが、其中詩格の正しくして、則るべきものを擧ぐれば、劉基は勿論、高啓、李東陽、李夢陽、何太復、邊貢、徐禎卿、高叔嗣、揚用修、李于鱗、王元美、謝茂秦、陳子龍、を以て尤も大作家とせねばならぬ、尙ほ其の他にも、薛君采、孫一元、高攀龍、徐燾、鄭露な



と云ふ作家も有りますが、何れも法式となすに足るべきものです。

今の人には、一概に明詩とさへ云へば、格調膚廓とばかり嘲りて、其の神髓を極める人が少ないのです、全体明詩中、殊に是等の諸作家は、大概復古學をば主張したもんだから、詩も亦た復古主義である、開元天寶(盛唐)以下には、詩なしと云ふ位にまで、唐以前の詩を崇び、且つ學んだので有ります、決して杜撰に、疎漏に、我儘勝手に、韻字平仄を並べて、斬新だとか、奇巧だとか、稱して下らぬ詩を作る流儀とは、月籠の差があります、今の人が、口を極めて喜ぶ所の性靈詩と云ふ奴は、明代の中頃から、始まつて、古人にも頼らず、古詩をも學ばずして、所謂己を以て師となすと云ふ、淺薄なる詩人から始つたことです、是れは朱竹垞などが、既に充分論じてあることです、其をしる頼着なく、我儘勝手の詩を作りて、性靈詩だの、何だの、世に誇つて居るのは、一向御氣が知れぬ譯です、其の性靈詩と云ふ奴を主張した人の重なるものは、誰れかと云へば、公安の三袁(三人)鐘伯敬、又は譚友夏などの如き、惡詩を作る人達で、實に箸にも棒にも掛らぬ奴等です、其れから清朝にな

ると、顧炎武、亭林、錢牧齋、吳梅村、宋荔裳、施愚山、王漁洋、朱竹垞等が大家と稱すべき人です、是れは崇禎から康熙までの人です、乾隆以下に至ては、多岐雜駁にして、殆んど前明の萬曆時代と同じく、盛極まつて衰ふるの兆が有りますから、之を學び之れに倣ふ程の善き手本は、稀れであります、

以上列記したる歴代の諸家は、何時の代でも何人でも問はず、己れの性の近き所と好む所に從て之を學ぶには、前にも申した通り、其の人其の詩の全体を能く考へ、雄渾とか、冲澹とか、流麗とかの長處を能く呑込んで、能く學びさへすれば、作家となるには、敢て難いとは思ひませぬ、

要之漢魏六朝の間にも、既に唐の詩風もあり、三唐の間にも、亦た六朝の典型は勿論、宋以下の詩風にも胚胎して居るのですから、之れに準じて唐にも宋の風あり、宋にも唐の風あり、遼、金、元、明、清にも亦た然りです、其故に雄渾なれば、雄渾と云ふ方向を取て、廣く歴代の中に求めて、専ら其れを宗旨として、鍊磨する方が宜しい、冲澹でも、流麗でも、悲壯でも、高古でも、洗鍊でも、清奇でも、飄逸でも、



曠遠でも、流動でも、總ての諸品に付て學べば、各々得る所が專一で有ります、到底詩は箇様に源委を極め、沿革をも同時に調査して、而して其の詩格詩風を學ぶと云ふのが、尤も肝要な處です、然るに佩文韻府、淵涵類函の類に依頼して居るとか、四書六經のみに拘泥して居るとかにて、肝腎な詩格や詩風を研究して、専ら學ぶと云ふとを力めんければ、到底本統の詩は出來ない譯です、去ればとて多く讀むばかりでも不可ない、古人も云ふ通りに、多く讀み、多く作り、多く鍊ると云ふとを、服膺せねばならぬのです、

終りに臨んで、一つ御話致して置くのは、兎角近人は古人の詩を讀まないのが通弊である、現に或る新聞の文苑擔當の人などは、大そう先生ぶつて居るが、其の腹筒たるべきお辨當の如何を問へば、古詩にては六朝以上は、沈德潛の古詩源一部のみにて、唐以下の詩は、三体詩、聯珠詩格、唐詩選、逝西六家詩、清二十四家詩抄などゝの如き、坊刻通行の選本類のみを讀みたるのみにて、曾て古今諸大家全集類には、一度も眼を通したことの無い先生が、いかにも傲然として、作家顔して、毎日

人の詩を善いだの、悪いだのと評して居るのは、片腹の痛い話ではありませんか、其れぢやア、其の先生の作詩は何うだと申すと、いや早や淺薄俚俗の極と申して、差支ないので有ります、是れは畢竟古大家を學ばぬ結果なりと、斷言するに憚りませぬ、

今一つ御咄致し度は、明詩を格調庸廓だと嘲る人の口實を聞けば、七才子は駄目だとして、一切排斥する人が有ります、嘗て、私は其の人に就て聞いたとありますが、七才子とは誰々で有るかど聞たら、李于麟、何太復、等の七子であると答へた、其の時私は實に捧腹に堪へませんでした、焉んぞ知らん、明代には、前後共に七子あり、まだ此の七子以外にも、何々七子とか、何七子とか名くる作家が、幾個もあるのです、其等の事をも辨へず、單に明七子と云ふて、而かも前後を混同したまへ、嘲つて居る位の、淺薄至極なものです、此人も當時相應に、有名な作家である、此の如く今の作家は、淺薄にして杜撰寫まるものです、其れに一向古人の詩を讀みもしなければ、研究もしないので、其れでは到底詩道の精華と、蘊奥を極めたとは、



豎から見ても、横から見ても、云へぬ譯です、要するに詩を學び、詩を作る人は、到底古人の詩を讀み、古人を學ぶのが、何よりの緊要な事と、私は平生から信じて居ります、語を替へて申したならば、詩には自から詩の道があるから、専門に研究涵養するとを怠つては、如何に佩文韻府の類が有つても、生きた淵涵類函が有つても、又理學に精しき人でも、本統の詩は出來ぬ譯です、先づ今日は此の事だけ、御咄致して置きまして、尙は次回には來年春永の日を待つて、緩々委しく御咄するとに致しませう、



龜谷省軒老先生詩話

先生字子誠。龜谷軒。舍號霞陰書屋。又搜奇齋。對馬嚴原人。神田區金澤町十一番地居住。京府士族。

詩は三百篇から、漢魏六朝に至り、温々乎として實に盛んで有つたが、唐代になつて初めて、古近体の体裁が定まつたゆへに、今時詩を學ばうと思ふものは、必ず法を唐代に取らざるべからずと考へます、唐代も初めは猶ほ六朝に沿襲したやうで有つたが、渠の杜子美に至つてから、諸体が皆な整頓して來たから、毫末も遺憾がないやうになつた、杜子美は實に詩權を一手に握りつめ、前代以來の諸体を一定して、美法を後代に垂れた詩聖です、是故に其の詩たるや、沈鬱雄渾を以て本となし、旁ら無數の法門を含有して居るゆへ、初學の士にて詩を學ばうと思つたら、唐の諸家を以て標的となし、就中杜集を誦讀玩味するのが一の手と思ひます、兎に角杜子美を以て唐代中摸範を後代に示したる詩聖とすれば、まゝ杜家は古代より近代に至る、詩流の中間に横はる一大湖水です、其故に杜氏以前の詩流は、悉く來て杜湖に入り、杜氏以後の詩流は、悉く溢れて杜湖より出でしものと見て間違が有りません、兎に角杜家は唐代の大湖なり、唐代の大家なり、唐代の詩聖なり、と云ふことを忘



れては成りませぬ

漢土の詩も文も、一代毎に衰へて行くやうだけれども、其の内に自から各大家名家があるのだ、宋の東坡、陸放翁、金の元遺山、明の高青邱、李空同、清の王漁洋、等は皆な其の体格にこそ相違はあれ、各々一代の大家です、詩は人々の好尚する所が有るから、各々宜しく其の好尚する所に従ふべしと致した處で、古大家中にて標的とする所を定めもせずして、自分勝手に輒近詩家の步趨に倣ふことは、識者の取らざる所なれば、宜しく戒しむべきことです、且つ古大家の詩は、初學の輩には解し難くして、面白からざるものなれども、常に務めて讀み居る中には、津々として味の多きこと、後世の詩に廻絶するもの有ることが相分ります、然るを古大家の詩を讀まずして専ら近人の詩を學ぶときは先入主となつて、小徑に墮るの恐れが有り、

扱て初學の輩の爲めに、其の讀むべく、手本とすべき品々を擧げて申し度いが、サア其の書物はと云ふと、至て品少ゆへ、購求するのに困ります、好し稀れに見當つた處で、甚だ高價で有ると、清貧の學者や、困窮書生の手には仲々入り難い、購求し難い、品少なの書物の名を、帖面の様にならべ立た處が、無駄の事ゆへ、實地購求の出来る、品物に付て話を致すことにしませう。

現今和版にては、杜律集解が六冊、杜詩偶評が三冊、王維詩集が三冊、岑參詩集が三冊、韋蘇州詩集が四冊、孟浩然詩集が一冊、杜樊川詩集が四冊、右に列記したる分が唐代の詩です、降て宋元の部には、東坡詩集、放翁詩抄、金詩選等が有ります、其から明朝になると、明詩別裁、高青邱詩集、七才子詩集、劉誠意詩抄等がある、其れから只今の清朝になると、蔣心餘詩抄、張船山詩草、浙西六家詩鈔等が有る、浙西は山陽翁の評本が有りまして、寔に宜しき詩評です、山陽翁の評本には、韓蘇詩抄が三冊、宋詩抄が四冊有ります、マア唐時代以來、只今の清朝に至るまでの分を擧げると、斯くの如しとは申すものゝ、近年和版ものが追々拂底になりましたから、寔に困入りました處が、青木嵩山堂が、唐本の新刻物を澤山賣出しましたるゆへ、是れが爲めに大に便利になりました、以前までは唐本と申すと、品が少くつて



價が高いので、仲々容易に尋常人の手には入らなかつた故、大きに困つて居ましたる處が、此の節になると、結構な書物が澤山ある上に、極々廉價で手に入るから、寔に我々に取つては、仕合です、今其の廉價で恰好な、品品を左に列記すれば、

唐賢三昧集箋註

三冊

壹圓八拾錢

國朝六家詩抄

六冊

貳圓〇五錢

此の六家の内には、王漁洋朱竹垞など申す、大家が有りますから、仲々價直が有ります、

唐人萬首絕句選

二冊

五拾錢

杜詩鏡註

十二冊

貳圓八拾錢

此の外唐宋詩醇、吳詩輯覽等があります、殊に王孟詩集、源奎律髓刊誤と云ふ本が有りますが、此の二書は廣瀬淡窓翁の摸範とせられた書物です、此等の書物の内より、好む所に付て丁寧に讀むと、自然に調子が分るやうになる、若し田舎の不自由なる土地にて、書物が乏き時分には、是亦た已むことを得ざる次第なれば、唐詩選

や三體詩に就て學ぶも宜しい、安濃津の津坂と云ふ人が、著はしました、絶句類選と云ふ書物は十冊ありますが、此も宜しいやうです、世間では餘り知りませんが、唐詩選は偽作なんです、偽作ですけれども、唐詩は唐詩に相違ないから、讀んでも宜しい、唐詩選は徂徠が買かぶりて、餘り大袈裟に吹聴したから、其れが爲めに大に流行したんです、明末にては、李于鄰七子派を、袁仲郎が攻撃して、陳腐じやと罵詈雑言しましたが、徂徠は七子の派を好まれましたゆへ、山本北山、大窪詩佛などが、袁仲郎を擯出して、攻撃を致しました、併しながら此も各一得一失が有ります、其後は隨園甌北など、追々新規な顔振れに成りました、山陽翁は深く之を歎息されて「此間文士不詳人之爭端、毎々視其後出豎幟者、輒欲黨屬之何哉」と申されたが眞に道理至極のと存じます、詩話と來たら、固より嗜好の道ですから、三日や四日終日御談を致しましても盡きませんが、際限ないから、まゝ是位の處で切上げると致しませう

私は宗對馬守の家來ですが、宗家は十万石格で、處々方々に飛地があるので、肥前



國田代にも領地が有つたが、此の田代の役人に、村山東一郎と云ふ老人が有つて、當時詩の大家と呼ばれた。廣瀬旭莊翁と最と懇意の間柄なりし廉を以て、この老人が公用にて對州に来るとき、旭莊翁の詩集、梅墩詩鈔を持參して、私に見せて呉れたから、私は一讀して面白く感じましたるまゝ、拙作を一巻と致しまして、旭莊翁の添削を、老人の手から頼みました、すると當時は現今の如き、便利至極な郵便がないから、殆んど半年も経過してから、やつと返辭が來た、其の返事には、詩稿は餘り澤山すぎるから、爾來は十首づゝ送ると致すべきやう認めて有つた、此の時私は十八か九で有つたつけ、其れから旭莊翁の命令通り、十首限りづゝ送ると致しまして、六七年間繼續しました、私の二十四歳の時でした、家を弟に譲つて、遊歴に出掛けましたが、大坂より九州を巡り、諸名家を訪問すると、皆な客分の取扱をして呉れた、これと云ふも旭莊翁が、種々吹聴をして置いて呉れたが爲めじや、實は片田舎の學問で、心中竊かに耻か敷思つて居つた處が、案に相違して、マアアア緩々遊んで行つて呉れると云ふ調子で、私も實は愉快に存じました、其から九州、

中國、京攝の間を徘徊して居ましたが、是非江戸へも、足踏致さうと思つて居たが、何を申すも當時長州征伐で、京都から東へ出向くことが出來ない、當時のとだから、うかとするど、直ぐ捕縛されると云ふ危険がある、其れに時勢が時勢だから、時々慷慨論などやつたから、一層目を付けられた、攝州伊丹の人にて、橋本大路と云ふ男は、香坡と號する學者で有つたが、これと今一人は阿州の人にて、藤井藍田と云ふ男と、拙者ども都合三人、前後一時に幕吏に捕へられたが、幸にして私は助りました、藤井は長州の吉田松蔭と懇意でありましたが、今は招魂社に祭つて有ります、明治元年拙者は肥前濱崎と云ふ處より、西京へ出ました處で、偶ま岩倉相公の知遇を得て、西京から東京へ轉じ、大學や、式部寮や、太政官に居ましたが、明治六年に至つて官を罷められ、御用滞在を命せられました、御用滞在は、今申す非職同様のものですが、聊か感ずる所有つて、心を官途に絶ち、著作に従事致しました、弱年の時は、論語考十五卷、左傳集掖十五卷を編述しましたが、明治六年以來は、糊口に追はれて餘義なく、つまらない書物を澤山著述致しました、併し其の多分は、



人の名前で出版致しました、それから五十歳以上は、糊口的の著作はよしまして、  
惟た讀書を以て、此上なき樂と致します、然しながら、徒らに讀書万卷の多きに及  
ぶも、毫も世道に補益なきは、歎息の至りと思ひます、

此の函山紀勝を、一冊進呈致しますから、御一覽下さい、これは箱根から鎌倉邊を  
遊歴致しました時に、筆に任せて作りました詩文ですが、支那人や日本諸家の批評  
も有りますれば、彼此御見較べなされば、或は一興にもなりませう、



### 蒲生髮亭老先生漢文話

先生名重章字子閏。號髮亭。又白髮道人。又青天白日樓主人。  
明治己亥年六十七矣。越後村松人。  
住越前區飯田町三丁目二十九番地。東京府士族。

文章の話ですか、承知致しましたが、併し逸然たることです、まゝの要點を摘んで申す  
と、文章は矢張り澤山作りもし、澤山讀みもせぬと出來ない、讀むのみにして、

作らぬときは、作れるやうにはならん、又作るのみにて、讀まぬときは、力量も  
なく、趣味もなく、理窟もなき文章のみ作るやうになる、而して出來上つたら、そ  
こで鍊磨をせぬと光が出てこない、初心のものは矢張り文章軌範や、八大家文讀本  
等を能く熟讀玩味して、之を手本となし、又廣く日本人の文章や、○近○代○の○文○章  
等を能く見るがよい、而して見て面白い處は、○諸○誦○する○と○か、○書○拔○く○と○か、○何○ん○で  
○も○丁○寧○に○讀○み○こ○な○す○が○宜○し○い、○そ○う○す○る○と○又○早○分○り○が○す○る、  
日本人の文章は、調子が低いから這入り易い、眞似し易いから、それ等を最初に讀  
んでから、梯子登りに清朝、明朝、それから元、金、宋、唐、六朝、漢魏等の文に  
入りて、博く讀み、多く作ると、段々上達する、どうも一概に何の位やつたら、其  
れで善いと云ふ制限がない、又何の書物を讀んで、何篇の文章を作ると、上手にな  
ると云ふとは斷言が出來ない、いよく研究して、いよく書く、いよく神妙  
な文章が出來る、其の至極な品になると、其の不思議なる妙力は、高き天をも撼か  
し、厚き地をも動かす、鬼神をも泣かしめ、人類をも感せしむると云ふ位だから、



一言でも天下を動かし、一筆でも後世に傳はる、立言ともなるのだから、餘程研究  
 しないではいけぬ、易々とは書くものではない、又易々とは書けない、  
 上手も、下手も、人柄による、先づ勉強して間斷なくやるが勝ちじや、今世間では  
 假名交りの文章が流行するが、假名交りの文章を書くもの、内には、眞の文章を書  
 くことを承知して居るものはない、海保漁村の文話や、齋藤拙堂の文話なども讀んで  
 置くと、大きに参考になる、先づ一博く讀み、多く作るのが、何より肝腎である、  
 世間を見渡すのに、一旦衰へた文運も、段々勃興して來た様だか、是れが眞の勃興  
 かと思ふと、其様でも有りません、詩文の研究などやるものがあつても、其の様子  
 を見ると、自分が眞に自力を造る爲めにやるのではなくつて、只た世間へ自分の待  
 文を披露致さうと云ふが志願である、目的であるのです、何故かと云ふと、只今で  
 は新聞雜誌が澤山ありますから、名家の筆でも入れて貰ひ、お負けに分に過ぎた批  
 評でも無理から頼み、世人が詩文章に眼が低いのを幸ひ、我物顔に得々と新聞や雜  
 誌に出して、一向耻ぢざるのみならず、又力めて自から吹聴してあるくと云ふ始末

なんですから、丸で詩文研究の趣意が違ふ、是れで文運が勃興したと云ふとが出来  
 ますか、昔日の人がやつたのは、皆な自力を作るが爲めであるのに、今時の人のや  
 るのは、之れに反して自分の力は、左程なくとも宜しいからまあ名家の批評でも得て  
 人を瞞着し虚名を一時博し度いと云ふ淺蕪な考に過ぎない、して見ると、勃興處で  
 はない、矢張り衰運なんです、之を寛政前後の文運に比較すると眞に九牛の一毛だ  
 にも及ばぬ義です、世間の文學者は今少し志望を廣く且つ大きく持て、充分うんと  
 力を入れて、自分の學を殖し、自分の見聞を博くし、自分の力量を増す、工夫をし  
 て貰ひ度い、水溜りではちやうどやつて、其れで水練上達と云ふ事は出来ない、假  
 名交りの文章位を書いて、其れで、文章家と云ふとは出来ない、此頃私の斐亭文鈔  
 が出来ました、一帙三巻で初篇上中下と分ちてあります、是れには諸家の序文や批  
 評が澤山出来ました、一部進呈致しますから、緩々御覽下さい、偉人傳も二十二卷  
 まで出来たが、未だ材料は澤山有けれども、私の著述は、當時流行の活字でやらな  
 くつて、皆な木版でやらせるから、元來高價につく處が、この諸物價騰貴の際、木版、



紙代、手間賃などが、餘程違ふから、先づ當分の處は見合せて居ます、文章の話も澤山あるけれども、まあ要點を摘んで申すとこんなものです、

此に一つ面白き御咄が有ります、これも矢張り文章に關係した話だから、序に申しませう。此頃或田舎から一人やつて來まして、先生此の文章は何ふで御坐いませう、實は善惡の御鑑定を願ひ度の爲めに、遙々上京致した理由で御座いますが、何うぞ御遠慮なく、御判定下されませ、有体に其の仔細を申上ねば、御分りに成りませまいから、一々申上ますが、村方で一の記念碑を建立致さうとの評議で御座いまして、田舎の事で御座いますゆゑ、まあ大學校の御方に御依頼申上りましたなら、完全無欠の品が出來やう、左候へば、小は他村、大は他郡の碑文よりは、比較的上等な品に相違ない、品が上等と來て居れば、我々の周旋致しました甲斐もあり、一村の面目も宜しく、地下の故人も嘸々満足するだらうとの考へから、人手を以て、大學校の教師某に依頼致しましたる處が、一も二もなく、得心致されましたるゆへ、一同満足に存じまして、其の出來上りを待つて居ますと、程なく到着致しましたから、

之を淨書致して、警察署に願出ましたる處が、署長さんが御覽に成りまして、此の文は間違のみ有つて、第一讀めない、こんなものを建立すると、一村の名譽に關するから、見合す方が宜からう、警察署にては、こんなものに許可を與へるとは出來ないとして、きつぱり撥付けられましたから、願出に參つた村方の委員共は、頭を掻き、いや仰は左るとながら、苟くも東京大學の教師をも、御勤め遊ばさる某先生に、御願ひ申上まして、斯く出來上つた品で御座いますがと、申した處が、大學の教師でも大先生でも、文章にならなくつて、理由も分らぬものに、許可を與へて建立させ、笑を後世に残すとは出來ないとして、堅く取て動かれざる様子が見へましたから、其れじやあどて、持歸りまして、發亭先生の御判断を仰ぐとに成つた理由で御座いますと云ふから、ね、左様かと申して、篤と見ると、成程讀めない、布置とか剪裁とか、何もそんな高尚な理窟は扱置き、第一文章になつて居らないのだ、字句を成さんのだ、これが家屋なれば、破損したら修葺をするとか、柱を取替へるとか、何とか致方も有るんだけれども、この文には困つた、柱の取替へも出來んが、



修覆をも六ヶ敷いと云ふわけで、始めから終りまでの處で、筆の入れ様もないのだ、それから私は、折角の持参では有るが、どうも自己の手では修覆も出来んが、療治も六ヶ敷いから、これは此のまま、葬てしまふ方が宜しいと申すと、田舎者は喫驚仰天の有様で有つたが、須臾あつて、然れば改めて先生にお願い申上ますから、然るべく御起草を……と申すから、應うう云ふとなら承知したとて、直ぐ書いて遣つたら、其れで村の者も初めて、迷の夢が覺めた、警察署でも許可をした、と云ふとなんです、實に面白い咄じやありませんか、これは頼むものも、頼むものだが、引受くるものも、引受くるもので、いくら大學の教授だつて、其の道でなければ、出来やう道理がないのだ、其れに無理に頼むと云ふは、頼むものが間違つて居るのだ又いくら頼まれたからと云つて、自分の腕に覺えのないのに、達て頼まれたからと云つて、引受けて書くと言ふは、是れを大胆と申さるか、瘦我慢と申さるか、兎に角引受けるものが間違つて居るのだ、世の中には、こんな下らない、眞似をするものがあるから、可笑いさ、これは幸に警察署にて、不認可となつが爲めに、笑を

後世に残さなくつて宜かつたが、此際若し警察署にて、認可をしたとすれば、無論笑を後世に残したのだ、此頃は紀念碑流行だから、こんな風の文章がまだ有るに違ひない、いや間違文章の方は、多分を占めて居るだらう、世の中の事は考へて見ると、實に馬鹿々々しいやら、可笑しいやら、妙なものだ、いくら理窟を知つて居つても、扱てこの理窟を、紙に寫すと云ふときには、文章の必要があるのだ、其の文章の書方も知らん癖に、書いた處で、其れは無法と云もので、文章にはならない、文章にならないものは、讀めるものではない、讀めぬ文章は、人が見ない、人が見ない、文章なら、最初から書ぬ方が宜しい、それに文章の稽古も、ろく／＼なくつて、ずつと先生氣取つて書いた處で、其れは世間の問屋で承知しません、仲々文章は六ヶ敷いものだ、上にも上ありで、此の作はと思つても、後で自分で氣が付くことがある、位だから、兎んや外目八目の人に見せたら、疵が分かる、又兎んや其道の上手に見せたら、ちやんと星を打たれるのさ、だから一生涯文章の稽古をして、それでさへ未熟だと人に笑はれ、自分でも未熟なことが、氣が付く事が有る



のだから、心ある人は容易には、人に詩文を見せないやうになる、其れに自分免許の天狗になつて、易々と引受けたり、易々と人に見せちらかすのは、つまり自分の未熟を人に廣告するやうなものさ、こんな話は心得の爲めに、内の塾生共にも、示して置きました。



内田遠湖先生漢文話

先生名周平。字仲遠。號湖遠。遠江國濱松人。當時神田猿樂町十一番地居住。

私は從來純粹の漢文を書くことに就ての考と、新聞雜誌等の文章を漢文体の口調に書くことに就ての考と、から二通り考へて居ますが、今日は單に純粹な漢文の方に就て御咄致します。扱て初學の輩に漢文を作らせる方法に就きましては、元祿の古き頃から、儒者が其の門人共に教へた仕方が有ります。又其の他文話とか隨筆

とか、種々に書きしるしもの、が、澤山有りますが、先づ第一に儒者の私塾にて、漢文を教へました其の方法から、逐次に申上ませう、其の方法は大略之を分ちて申しますと、凡そ四種あります。

第一 翻譯

これは假名交り文、即ち軍記、物語、武將感狀記、常山紀談、徒然草等の和文を漢文に翻譯させることです。が、徂徠が門人に教へました、翻譯法は、漢文練習上、甚だ必要です。其れには漢語を解釋した漢文筌蹄と申す本がありますが、此の書は先づ形容詞の種類を、重に集めたものです。此の翻譯をなししは、徂徠のみならず、其の他の學者も行ひましたが、重もに行ふた人は、徂徠で有つたのです。扱て徂徠が實行してから、其の効が見えたゆゑか、爾來段々儒者の家塾に、行はれるやうに成つて來ました。近世に至つて帆足萬里の塾でも、獎勵したが、帆足の著はした、修辭道と云ふ本の中に、翻譯の例が示して有りました。其の弟子に、岡松璽谷と申す儒者がありましたが、是れも矢張り、其の規矩によつ



て、此の流義を行つて居ましたが、岡松の著はした、初學文範と云ふものが有りませんが、其の和文を漢文に翻譯した所は、仲々能く出来て居ました、漢文稽古の楷梯とも申すべき、此種の書物は、山本北山の作文率を初め、色々出来たやうでしたが、帆足の橘城記事や、岡松の初學文範等が、能く出来て居ましたから、假名文翻譯の手本には、至極宜しう御座います、

### 第二 復文

これは伊藤東涯が唱へ初めたことのやうに存じます、東涯の著はした作文眞訣と云ふ本が有りますが、誠に宜しう御座います、只今手元には有りませぬゆゑ、能くは分りませぬが、復文の例も示して有ります、是れは漢文を假名文に直して、この直してある分を、人に與ふて原文に射復させるのですから、是れは人のまだ読み知らぬ、隨筆雜記などより、面白き部分を取つてやつても、一方には字を覺ゆる益も有り、一方には面白半分によれます、漢學者には皆川棋園が種々世話をしまして、習文録を作りました、此の習文録は初篇、二篇、三篇と、都合十冊ばかり有りますが、

其が内に、假名文に直させた分と、漢文の分と、別々ニ出来て有ります、其の他甲乙判も有りまして、同一「とる」と云ふ字の意味にも、場所によりて取、把、執等の字を用ふることを區別して説いて有ります、これは習文録の附録となつて居ます、この復文は當時實際、其の塾で行つたに違ひない、近頃でも漢學の塾には、初學を相手によく行つたもので有ります、

### 第三 諧誦

この諧誦は背誦とも云ふが、極々面白い文章は屢々讀むが宜しい、屢々讀むと調子が付いて來て、諧誦も輒く出来るやうになる、又名文を抜書して、其れを熟讀玩味して諧誦しろと、教へたのは、先輩にも有りますが、近頃では頼山陽です、山陽は若い時、好んで史記を讀んださうです、定めし史記中の名文は、諧誦して居ましたでせう、森田節齋は山陽の門人なるが、矢張り面白い文章を諧誦したやうだ、諧誦は復文や翻譯文よりも、程度が進んで居らぬと出来ないが、兎に角一篇の文を通讀して、これを玩味しながら、諧誦する時には、知らず知らず前後の關係を知つて來



て、抑揚も頓挫も照應も波瀾も皆な自然に分つて來ます。私も其の眞似をして、實行して見ましたが、最初書籍を握つて誦讀を初め、後には書籍を離れて遣りますと、段々出來てきます。此の事を實行したのは、山陽ばかりではなく、他の儒者も獎勵したやうですが、先づ一番盛んにやつたのは山陽でせう。

#### 第四 背書

これは誦讀と復文とを併行するもので、時間も費やし、骨も折れますが、實行上餘程利益のあるものです。嘗て林鶴梁の門にて之を實行したと申します。これは例へば上于襄陽書を來週何日まで能く誦讀して、間違ないやうに記憶して來い、我が前にて背書さす可しと申付けるのです。背書とは書物を背後に置いて、原文通りに書きしるすことなるが、第一能く誦讀して居らねばならぬ、字數も原文通りにせねばならぬゆゑ、實際一字たりとも抜くことが出來ない、其上動詞、助字、等も能く知らねばならぬ、誦讀は音で覚えて居れば宜いけれども、背書は字を覚えて居らねばならぬ、「みる」と云ふ詞でも、見の字も視の字も觀の字もあるが、其れを能く覺

えて居らねばならぬ、同じく「これ」と讀んで居つても、此の字も、是の字も、斯の字もある、加之此處には焉の字が置てあるか、矣の字があるか、此間には於の字が入れてあるか、于の字か、乎の字かと云ふ様に、一々知つて居らねば出來ぬ、是れは甚た面倒なことで有りますが、漢學専門の人なれば、之を實行して其の効力を見るものが著るしいものです。併し今日の學生は、他の學科もあることゆゑ、背書など云ふことは、實際出來べしとも思はれません。鶴梁の門に居つた人から聞きますに、文章軌範一部位を悉く背書すれば、一々文章の講釋を聽かずとも、漢文が能く出來るやうになると申されました。

まゝ右に申しました通り、此の四通のやうですが、此の四通の中、何が今日尤も適當で御座いませうかと云ふと、漢學者の塾なら、二種若くは三種位は、行ふことが出來ます。併し今日尋常中學校より、高等學校位の生徒には、漢文を作らしむる必要はなけれども、高等學校にありても、文科大学に入る、漢文科志望者は、此の内一二種の實行が必要です。其の他家に在りて、文章の修行を希望するものは、先づ誦



誦とか、復文とかはなると、差當りまわ先生とか、朋友とか、相手がなくてはならないが、之れに反して、八大家文讀本とか、文章軌範とかを、誦するには、土曜日の半休や、日曜日の全休には、上野公園を散歩しながらも、誦するやうにせねばならぬ、又全篇讀むことの出来ぬ時には、上半分丈け讀むことと致し、其の内に追々捗るやうにすると、漸次覺へるやうになる、然るに通常の考にては、誦は時間が掛るゆゑ、余程漢文の好きな人なら、趣味があつて面白く感じるだろうが、否らざる時には、却て困難であつて出来ぬと云ふ、併しながら古人の文でも、佳作傑篇と云ふは、太抵音調がよろしいもので、初めは慕々しく行かぬやうだけれども、追々習れて來るとすら、誦が出来て、骨も折れず直ぐ讀めるやうに成ります、すると面白くつて溜らなくなつて來ます、それゆゑに一個人として讀むには、誦が第一で御座います、私は音調に注意をして、讀むやうに致しますが、一段の處に來ると、少し休むやうに致し、急所は急に讀み、優長の處には優長に讀むやうに致して、玩味の出来るやうにする、其様な風にする、起伏照應などが自然に分

つて來ます、是れは古人がすでに行つた、前例を申したので有りますが、併し現今の狀態より申さば、漢文の稽古には、矢張り復文と誦とが、適用されるものではないかと思はれます、昔時から三多説と申しまして、讀多、作多、商量多、と云ふことも有ります、又文章とか、詩歌などを考ふるには、馬上、枕上、廁上、と云ふ三上説も有ります、これは人の能く知つて居ることと有ります、

又漢文研究上に比較的好著述と云ふべきものは伊藤東涯の作文眞訣皆川淇園の淇園文話海保漁村の漁村文話等が有ります、漢人の著にも段々有りますが、陳騷の文則及び文章歐冶などが尤もよく出來て居ます、

又字義を解釋したものに、徂徠の譯文筌蹄、東涯の操觚字訣、用字格、釋大典の文語解、詩語解等があります、皆川の淇園文話は先づ宜しき方に考へますが、皆川が字義に關する著述は澤山ある、而かもいづれも皆な、委しく解釋して有つても、分り兼ねる所が甚だ多く有ります、皆川の門人に三宅橋園と云ふものが有りましたが、此人の作りました、助語審象と云ふ本は、助字の解釋をしたものです、之を見ると助



字の意味は大略分ります、又東條一堂が作りし助字新譯と云ふものは、助字の用例を示したるものにて、頗る重寶で有りますが、字が不足で全備しません、又皆川淇園が物せし虚字解とて、虚字を解釋したものがありますが、是れ亦曖昧です、文韻や隨筆に關する咄は、是にて略し、結尾と致しまして、更らに他に移ります、初て近頃讀みましたる書物の中にて、作文上至極の心得と存じまするものが、一〇〇有ります、是れ實に秘訣とも申すべきものです、言葉替へて申さば、是れまで種々に申しました事柄の内の要を取つたものです、开は近頃清朝の人に、曾國藩と云ふ豪傑が有りましたが、是れは今の李鴻章の師匠ですが、學問も文章も共に善く出来た人でした、仲々達文です、其文集は凡そ數十卷程ありますが、其の文集中に、初學の輩に教へたことが書いて有ります、殊に文章の事に付教が有りますが、是れは實に秘訣として守るべきものです、其れは看、讀、寫、作と云ふとですが、曾國藩は此の四箇の中一を缺いても到底片輪ものたるを免れぬゆゑ、少年銳氣の時分に、奮發して之を實行すれば、必ず作家になれると申しました、

看とは何によらず廣く讀んで、精細なる取調杯はせず、只た作文の材料を得んが爲めに、博く見るなり、經書や正史の外に、諸子雜家にも、隨筆漫錄にも、今日にて申さば、新聞、雜誌を讀むも宜し、只た博く其の材料を得るが爲めなれば、恰かも軍を爲して、城を攻むるとの一般で有りました、今日一城を攻めて、一を取れば、明日も亦た一城を攻めて、一を取ると云ふが如き、風にやるのです、左様すれば、追々に涉り來りて、終には澤山覺える様になります、且又是等の書籍は、經學などは違ひますから、机に凭りて行儀正しくして、讀むにも及ぶまい、横臥しながら讀みても、差支へないから、面白半分に進みます、讀とは委しく讀むと云ふとですが、これは正しい經書とか、歴史とかを能く、氣を入れて讀み抜き、精密に格言要語を吟味すると云ふのです、此の方になると、何も澤山讀むには及びませぬ、大抵部類を限つて、嗜好な種類と、志望の學科を、一讀再讀に止まらず、十度も二十度もやるやうにする、而して、すらく諳誦が出来る位までやるが宜しい、入大家文讀本中の文章なら、いづれも大きな優劣は有り



ませんが、其が中で自分の好きなもの、一二人若しくは二三人の、文を別段熟讀玩味するが宜しい、學者は皆な各々自己が、崇拜する所の大家の文章を熟讀して、而後斯く獨得の名文を、作るやうになつたので有ります、此の讀と云ふことは、丁度守錢奴が、毎日金銭をいぢつて樂むと同様で有りまして大切に之を失はぬ様に、一度でも二度でも、多く讀むのが宜しいのです。

寫とはこれは古書若くは古人の文を、手づから寫すことを申すものにて其の一篇若くは其の要語、格言を寫すものです、面白き文章を見た時には、之を寫すのが宜しい、私は此前書生をして居りました時分に、書物の數が至て少ないから、段々人から借りて、寫取りましたが、随分澤山になりました、現今尙ほ手元に残つて居るものが四五冊許り有ります、これを課餘漫抄と名けて、佳作名文と思つたら、直ぐ寫して置きました、其の寫すと云ふことは、今時の人から考へると、大そう時間つぶしの様に、思ふかも知れぬが、其れを寫す間に文字を覺えるし、文章の前後の照應や波瀾を覺えます、私は點のなき本が好きで御座いまして、寫した文には自から

點を付け段落を付けながら、讀みましたが、其様な風に自分で。書生の時分に付けましたものが、後に名家の評本を得て、くらべて見まするに、大体は異りなくて同一でした、中には或は古人の分よりも却て宜しき處さへ間々見へました、物事は熱心に且つ本氣にさへやれば、其の通りに參ります、且つ段落を付けるのみならず、又批圈を付ける様にすると、自然に前後の關係が分つて來ます、して寫す間に同一の字に出逢ふことが有りますが、同一の場合に、同一の字が出て來ると、此の時分に、成程かう云ふ時に、かう云ふ風な字を用うるのが、規則と見えるなど、自然の中に自得を致します、だから寫すのは、餘程自分の爲めになります、我邦の先儒伊藤東涯や、太宰春臺も、古書を讀んだら、抄寫をせよと言ふて置かれました、作とはこれは實際の思想を文字に表出することで、成丈け澤山作るがよろしい、併し千篇一律では駄目だ、まづ作文の根柢となるべき、澤山の有益な書物を委しく讀み置くが宜しい、學問は精を費ふから、委しく調べて、確乎たる議論を立てるとは宜しいが、經學一方の人などは、文章が面白くない、多く乾燥にてある、箇様な時



は、折角の議論も引立たないから、高尚な議論をすると同時に、其の文章も面白くもあり、優美でも有ると云ふ様に致したきものです、又看讀寫作は同時にやるが宜しい、初め寫して而後作るが宜しきかと云ふに、其れよりは矢張り作るが宜しい、而して作る間に寫すが宜しい、

私が記とか、序とかを作りますときには、随分其の間に、時日を費すことが有りますが、其れは推敲中に、古人の文を讀んで見ると、自分の欠點が分りますから、分ると同時に、又改めます、論文と雖ども、亦た其の通りです、其の論文起草中に、古人の人物論などを讀んで、其の論の立方や、文字の使ひ方を、研究するので、して氣が付くと其處で改竄を致します、是れまで讀みました、澤山の隨筆又は文話中にて、會國藩の看讀寫作程好きものはないと考へます、私は書生の時から、實際今日まで行つて利益を得たとですから、特に此に申して置いたのです、先づ是れにて終局と致して置きますが、終りに臨んで今一つ、申置き度きとは作方ですが、總て文を作りますには、如何なる方法を取るかと云ふと、逆も始めから文法に合すとは

出来ないから、一篇中にて、下からでも、中程からでも、出來た處から書出す、而して第一段の趣向が出來れば、又第二段の事を書出す、斯くして一節又二節と書出すときには、前後の照應を考へて、この趣意を前に置いたが、これは後に回す方が宜からう、此の一節の趣意は宜しいけれども、文字が不足ゆゑ、言葉を多くして飾を付けるなど、種々工夫をするのが第一です、此の如くにしてやるが宜しい、全体趣向が立ち、思想が充るときには、どん／＼拍子で書けるものですが、若し之れに反して頭の鈍き時には、趣向も思想も足らぬ勝にて、仲々筆先が運ばぬものです、併し大抵初めから順序は立たぬものですから、自分が考へたことを段々加へるが宜しい、斯くして追々増加して行き、扱て一篇の文章を成した揚句で、言葉を修正するとか、折角書並べたが、餘り冗長すぎるから、削取るとか、また文句が足りぬから、更らに言葉を加へるとか、何とかそれ／＼工夫を付けるが宜しいと考へます、





# 野口寧齋先生詩話

先生名式字實郷、通稱一太郎、肥前諺早人  
現住麹町區下二番町五十六番地

五十四

扱て方今詩運の盛衰如何と申せば、先づ盛んなりと云ふて然るべきやうに存じます、其の衰へてあるか、盛んで有るかと云ふ比較的議論は、是より順次に述べますが、先づ第一に維新の大改革以來之状態から、漸次に關係の及ぶ所を述べます、全体明治の御一新の時に當りましては、舊習を去つて、新風を起すと云ふ理由で、何でも舊物と來たら、片端から打破するが宜しい、其様しないのは文明開化ではないと申したから、其の主義で何でも箇でも改革しと呼んで、從來の事は善も惡も打破して仕舞ふ事となり、果ては上野の公園地をも拂下げて、千年の老樹は容捨なく根本から引つ切つて煉瓦造りでも建築致さうかと申した人が有ります、又奈良の有名なる大寺院をも同じく拂下げると云ふことになりました、處が扱ていよいよ賣ると申す段になると、何處からも買手が顯はれて來ないから、片端から火を掛けて焼拂ふべし、何の容捨の入るものか、千有餘年の陳風慣習を一火に焼拂ふて、文明開化の新風を吹かすべしと決したる、所が斯る大寺院を焼かれた日には、飛火がして困る

からといふ嘆願が有て、見合せになつたと云ふ話もありません、又泉州では歌で名高く音に聞く高師の濱の松も、伐り去るべしとの事から時の縣令税所篤と云ふ人が、配下を指揮して伐拂ひに着手する途端に、大久保内務卿が公務を以て其處を通行し、此の体を見て取て残念に存じ、一首の和歌を作つて其の亂暴なことを諷した處から、其事は見合せとなり、今では其の和歌を碑に彫んで、大久保公の徳を慕ふて居るといふ事でありませう、

今一つ申せば岡山に西毅一と云ふ人が有ります、此の人は森田節齋の弟子で、亡父とは同門ですが、明治三年の頃大參事を勤めて居ましたが、是れも矢張り此の破壊主義を唱へて、果ては開谷校をも打毀さうとしました、此の開谷校は、岡山の名君、新太郎少將が熊澤蕃山、津田左源太等と語り構造せし學校で、今を距ると二百八九十年頃の建築にて、實に盡美盡善と申すものです、其の藩主が設立せられましる至美至善なる學校を、自から遙々出馬して打毀しに取掛つた處が、石垣は九形の石にて壘み掛けてある構造で、其の堅固なると云はん方なし、迎も素人の力で破



壊されたものじや有ません處から、餘義なく寄宿舎一棟丈けを焼いて、歸て來たと申すのですが、其後になると最初の破壊者が、當時は保守者となり、其身は岡山を去つて閑谷に入り、終生此處にて學校を保存守護するの決心にて、自から其の中學校長となりて、盛んにやつて居ります、是も同氏の直話で虚言でも何んでも無いのです、

先づ其様云ふ風に、何でも叩きこわす事を善しと致して居ましたゆゑ、學問の如きも、何んでも西洋でなくつてはならない、日本の學問や、支那の文學は、實に陳腐で役に立たないと云ふ理由だから、勿論詩の如きも、此の時に當りて、敢て振返つて見るものもなく、實に寥々たる有様でしたが、其の間に相變らず韻書を撰練るか、詩本を繕くとか云ふ輩は、時世の何物たるを知らざる、隱居位の遊仕事に過ぎざりしが、其頃東京に於て、絶えざると綾の如き詩運を、僅かに維持して來たのは、舊幕の遺臣と稱して居る連中、又は江戸ッ子を以て自ら任じて居る仲間でも有りました、名を指して云はゞ、大沼枕山、向山黃村等の先生が、愚み半分によら、不平半

分やらに、僅かに詩の命脈を保つて居たと云ふても宜しい、其後に至りまして、春濤の新文詩、成島柳北の月新誌、佐田白茅の明治詩文などが出てから、幾分か詩運を鼓吹した、其れから段々年を経るに隨つて、臺閣の人にも、詩を作る人が多くなつて來ましたが、是れもまだ一〇一世を風靡すると云ふ様な勢には參りませんでした、

然るに十六七年頃から、若手の者にそろそろ詩をやるものが出て來て、隨て穎才新誌の如きものが、澤山出來たから、學校の内職に、詩文添削所と云ふたやうな、大きな看板を掲げたものが澤山有りました、其故隨分賑々敷やうに見えますけれども、是より先きに、老人は老人のみにて、團體を組んで居ましたと同じく、後より勃興した若手の連中も、若手のみの連中にて、團體を組んで居ますゆゑ、只だ各々一隅に割據して、騒いで居るのですから、之を目して全体に詩道が盛んになつたとは申されぬ、云はゞ老人と若手の間に、一大溝渠が出來て居ますから、其の溝渠に橋梁を掛けて、双方一所になつて、氣脈を相通するやうにならねば、決して詩壇全体



の隆盛を料るとは、出来まいと識者は申したとです。然るに世の中が種々に變革して来て、甲が出来れば乙が反動を起すと云ふ様なわけで、我邦の政策が當時専ら歐化主義を取て居たのが、其の極點になつて、終には保守の反動が起つて来た、學問なども今までは西洋かぶれで、日本の事や、支那の事と云ふと、一向つまらないやうに思つて居ましたが、段々西洋かぶれの極處に達してから、扱て是れまで仕來りの日本や支那を追想して見ると、矢張り捨てたものでもない、否な必要なものがあると、其處で迷の夢が覺めて来て、能く考へて見ると、どうも遠近、疎親、新舊等の關係から申すときは、日本や支那の事柄を知つて、而後彼の西洋の事を知る方は、穩當なる順序で有ると云ふ有様になつて來ました、其處で日本支那に關係することを取調べるものが、多くなつて来て、隨て詩文の様なものまで、是等と共に復興して來まして一旦中絶して居ました先生等が、再度遣り出すと云ふやうなわけになりました、勿論新進のもの、中にも、熱心のものも出來て來ましたが、其れに折も折で新聞や雜誌などに詩を載せるのが盛んになつた、尤もこれまでもて、朝野新

聞や、毎日新聞などに、詩を載せては居たが、中々讀者を動かすと云ふ勢力はなかつた、然るに二十年以後には、只た慰み半分に載せるのみならず、又慰み半分に見るのみならず、全体相互に勉強して詩を作り出し、又詩を出しもし、詩を評しもあると云ふ様な有様になつて來た、勿論其の新聞中の詩には、種々のものが有るから、白髮老先生の詩も有る、青衿少年の詩も有る、所謂橋を掛けて老弱兩方の路を開き、垣根を取去つて兩方とも、一つの世界に並べたものですから、云はゞ明治の詩壇全体が、殆んど新聞紙の文苑之上に見はれて居る、と申しても宜しい様になりました、殊に從來とは違ひ、支那との交際が最も親密に成つて來ましたから、文字の必要は益すゞ度を進めて來まして、公使館に來て居る支那人なども、好んで此方の文人に交際を求めるととなり、又彼方から詩集なども、悉く輸入して來ると云ふ有様でありますから、現に從來最も奇らしいと思つて居つた書物が、今は有りふれたものになつてしまふと云ふ有様です、其他種々の便利がある、其上に只今云ふ通り新聞があつて、日々詩を出すに云ふ有様になつて、若手の詩人は段々増殖して



來る、白髮の老詩人は若返へりて、勉強すると云ふ次第で有りますから、其處で随分大に盛んになつて參りました、

時も時二十七八年の戦役が起つた、日本國民として苟くも歎氣の情あるものは、之を發起するのは文字にありと申す場合が到來した、而して其故少しく才あるものは、其の文字を盛んに作りました、相手が支那で有るから、詩を作るには尤も便利で有つて、其の上題目が從軍とか、何とか云ふものですから、尤も人を動すものですから、當時は全國を通して誰彼れの差別なく、争ふて含英などを燃練つて居りました、左様でありましたから、就中大家とか名家とか云はれる人には、仲々名作があつた、雄篇大作が有つた、凡て古來一國に大危難とか、大事業とか有ると、自然人心に一大變動が出来る、此の變動が詩歌文章に見はれるのだから、古來未曾有の此の大事件を機として、全國の作者が腕を振つて遣りました、其の勢は仲々どうして、一通りの事ぢありませんよ、其れ故私は明治以後の詩運は、或は此時が絶頂ではないかと想像した位でした、

其れから後は、未だ是れほど云ふ程の變化は見はれざるも、又戦争中の様な昌運ではないとするも、一旦勃興した詩運は仲々衰へない、一旦昌運の域にまで進みし詩歩は仲々退却しない、其の理由は左程上手と云ふでなくつても、一旦手を出して味を覺めたのは、仲々どうして其の甘味が忘れられぬものと見ゆ、一たび始めた若手の詩人連中は、引續いて遣つて居ると云ふ位の有様ですから、全國至る處にて其の新聞に詩を出さぬ處はないと云つても宜しい程です、して見ると、今日は全体から見渡すときには、比較的詩運が隆盛であると云ふて可なりと存じますけれども、是れは今云ふ通り、種々の原因があつて、此の盛大になつたのでありますが、又一方から申すと幸にも此時、作者の才學が前代に卓越したものが居て、是れ等が鼓吹して此の通りの盛大に導いて來たことも忘れてはなりません、其處で更らに進んで前代と比較して、當今は盛んであるか衰へてあるかと云ふと、先づ盛んなりと申して宜しからうと存じます、其れのみならず、詩運も大に進歩して居ることと存じます、そこで今日の詩と前代の詩と、比較するに、上下床の別ちが有るやうに思



はれます、否な區別が有ると斷言しても差支は有りません、此に一つの注意して置かねばならない一條は、詩才と詩學とを區別して見ると、今人は才に富んで、學に貧しと云はざるべからず、而して昔人は比較的に學問が有つたと申して宜しい、こゝいふ傾きが来るのは、無理ではない、其れは昔人は學問をするのに、先づ大學中庸と、それから論語孟子諸子五經二十一史と云ふ風に、段々順序を立て、研究するから、自から自力が付く、無論詩を作るが爲めに研究するのではないけれども詩の材料となるべきものが、自然と覚え込んで居るわけである、其故に其作つた詩に、自然と書卷の氣が見はれて居るやうに覺ふるが、今人は然らず、其わけは小學校で研究する學問が、昔日のものと違ふから、讀むものが皆な寧ろ詩の材料には、縁故の遠いものゝみ讀んで居るのであります、其處で詩を學ばうとするには、勢い詩を學ぶに足るだけの材料を得んが爲め、他に其支けの學問を致さねばならぬわけです、其様しないと充分に出来ない、其れかと申して左様するには時間が掛る、態々となると仲々おつくうで、又其れを遣つて居る暇もありません、研究する餘裕がない

と、其處で勢學問がなくなつて、詩を作ると云ふ傾きが来るのですが、そこで學問よりは、才を多く應用する事が多くなります、

夫れ樹木は根抵が堅固なるにあらざれば、充分善き果實を得ることが、出来ない筈ですから、今の少年詩人も出來得る限りは、自ら此の邊の利害得失を講究して、其の根抵を養ふやうにせざれば、藉令ひ一時盛なるやうでも、何時何んとき枯れ果て、萎むかも知れません、其様して見ると、假令ひ今日詩運が盛んであると云ふても、そんなことで其内忽ち衰運を來すかも知れぬ、其故目下の状態にては、折角挽回したこの詩運を、精々勉強して之を維持し、衰運を未然の中に防禦すると云ふのが肝腎である、それには先づ根抵を養ふと云ふことが、尤も必要である、若し自分の詩が新聞や雜誌などに出たのを讀んで、得意顔に喜んで、虚名を得たことを自惚して、自分天狗になる様では、到底今日の盛運を維持して行くことが、出來ないと私は考へます、要するに、如何なる事業にても、そうではあるが、一足飛びには二階に上れないから、勢必す一段つゝ拾ふて、梯子段を登つて行くと云ふわけで有りますが、詩學と



ても其れと同様の理由です。詩道も何も六ヶしい事は御座りません、何人でもやつて見て、一寸出来て来る、其處が梯子の一段目で、其れからは一段く上るのであります。其れからの一段は、餘程熱心のものでなければ出来ないと、又才識有るものでなくては、上ることが出来ない、恰かも碁を打つと同様です、素人の碁打が打集つて、碁を打つときには、碁の出来は大抵同様なもので、其の邊までは大概のものが打てる處だが、併し其れから今一目と上るのは、非常な熱心ものか、又は力量あるものか、本氣にやるものでなくつては出来ない、詩も其れと同様です、其處で眼は高し手は低しと云ふ諺があるのです、併し其の諺は寧ろ悪口の意味で、申した義で有りまして、眼は批評と申す義で、手は伎倆と申す意なんです、凡そ人は批評や、議論をさせると、仲々甘く云ひ廻はすが、扱て作らせると、其様はいけない、まわこ云ふ風が、世間通常の有様ですが、併し私の考へには、眼は高く手は低しと云ふとは、尤も必要の事と存じます、只た必要と思ふのみならず、實に其様なくてはならぬと思ひます、奈となれば、吾々が勉強するとか、進歩するとか、申して騒ぐ

のは何の爲めかと申すと、畢竟自分の不足を補はんが爲めの故であるから、此の際若し自分の眼孔が、手と同一の地位に在るとすれば、吾々は必ず勢其の伎倆に安んじて、進歩の考があらざるやうになる、其處で眼が先に立つからは、自分で自分の伎倆に満足することが出来ない、何とか勉強奮發して工風に工風を凝らし、自分が満足する丈けの伎倆を作るが爲めに勉強する、即ち手が梯子段の下から一段目に居る時に、眼が二段目の處に居る、其處で手を進めて二段目の處まで登らしむる爲め、勉強して幸に二段目に達するを得ると假定せんか、其時には眼は下から三段目に進んで居るべし、然るとき又手を三段目まで上らしめんとて勉強する、手が既に三段目に上れば、則ち又眼は四段目に進む、かう云ふ風にするから、進歩の度も著しいとに相違ない、之を譬ふれば恰かも影の形を追ふが如きものです、形進めば影亦た進みて、相追隨するけれども、何うしても影の追付かざる處に、面白味オモシロが有るのですから、若し此の際自分の眼が、自分の手に満足したなら、其の人の進歩が止まつて、進まないものと断定して差支ない、其故人間は何でも、兎角眼高手低でなく



てはならない、眼と手とが一致と云ふ有様が、世の中に多いやうでは困ります、其れに地方などの人は、鳥なき郷里の蝙蝠で、自分天狗で餘程の先生を氣取つて居られては困ります、早い話が可笑い詩を遠慮なく突出して、添削して呉れると頼むから、此方らでは正直に意見を加へてやると、嫌いやな顔付をするものがある、又評を書いて呉れる、其れも長い評でないと困ると云ふから、何故かと尋ねると、何うも長い評でない、人が善く思つて呉れないと云ふものが澤山有る、稽古最中の先生方が、今時からこんな風に考へてまれば、實に困りますね、實に御本人共の爲めに、氣毒に思ふのみならず、實に詩道の爲めに閉口する、其れで詩道の維持が出来るか、詩道の挽回が出来るか、六ヶしいものだ、或は失脚墮して、詩運の衰萎になりはすまいかと、婆心ながらの前途の事が案じられます、一體善い處を褒めて貰ふよりは、悪い處を訂正して貰うて、而して勉強するやうでなくつては、到底駄目だと考へます、

そこで少し話が違ひますが、かう云ふ事が有ります、或先輩の咄に、「自分達が詩を作る時分、即ち御一新以前には、絶句が流行したのだが、今時新聞を見ると、大方は律詩又は古詩で有つて、絶句などは少ないと云つても宜しい事でありますが、夫には種々理窟も有る事で、諷誦に便利な爲めでも有らうし、天保安政などの絶句を出版して、大に行はれた爲めでも有らう」、其の言葉に就て私が考へますのに、昔日の人は書く爲めに作つたのが多く、今時の人は出す爲めに作るのが多い、と云ふ事が有ります、なせなれば、昔日は遊歴する事が流行する處から、自然の勢で人々競ふて字を習ふて、書をかゝんとする傾きが有る、其れに日本では自分の詩を、書くことが普通で有るのに、それには絶句が一番、都合の宜しいと云ふ處から、其故に必用上絶句を、比較的、多く作る傾きが有つたのでせうよ、現今でも書の大家先生とも呼ばれる人に、絶句殊に五言絶句などを澤山作られるのは、矢張り其の理由なんです、處が今の若いものは、書で飯を食ふものがないので、自然書が下手だ、嘗ても或會での咄で有つたが、ある先生が、今の若いものは詩が旨いが、字がまづいといはれたことが有つた、其様云ふ風であるから、書く爲めに作る詩ではない、只だ新聞や



雑誌に出す爲めに作ると云ふ詩である、其様云ふ傾きがあるが、其の弊は先きに申し如く、今時の人が作る詩は、出す爲めに評を書いて呉れる、其の評も人に褒められるやうに、成丈け面白く褒めて置いて呉れると云ふのだが、此様な弊風は以後改めて貰ひ度いものである、これも序に申して置くが、詩の大体から申しますと、書く爲めに作るのと、出す爲めに作るのと、何れが宜しきかと申すと、比較的骨を折る丈けに、出す爲めに作る方が幾分か宜しい處が、有るかも知れませんが、併しこれは書く爲めと、出す爲めとの比較にて、實に區々たることですが、一步を進めて申すと、傳へる爲めに作る様にならなくつては、第一詩の本体に叶ひません、勿論傳はると、傳はらぬとは、人に存するので、吾人の敢て關する所で有りませんが、詩も自分の性情を十分に著はして、毫も遺憾ないやうに至れば、則ち傳はるが爲めに、作るものと云ふて差支ありません、

其處で私が詩人になりました、道行を御咄致せとの事ですが、別に面白い事は御座いません、全体私は小學校で育ちましたから、不完全ながらも明治の教育を受けたもので、支那の文字で頭を固めたわけでも無つたから、最初は詩人などになる考は、毫も有りませんでした、しかも十一二歳の頃は、寧ろ博物學者になる考へでして、殊に動物學其内でも、哺乳獸の事を研究することが、好で有りましたから、其の學問を致し度い考へでありました、今で能く覚えて居ますが、課程の内が一番劣等であつたのが、書と畫でありまして、無論何時も點が取れませんでした、最も作文の方は亡父が面倒を見てくれましたし、宅に参考にするものがありましたから、先づ成績は宜かつた方です、其様云ふ風でしたから、其頃近處の小學校の開業式などには、何時も總代的に祝文を作らせられました、殊に彼の第一勸業博覽會の開場の節も、東叡山の記といつて作つて出したことが有りました、其様な風で有つたから、幾分詩想位は浮んで來たのかも知れぬが、作つたことはなかつた、夫から學校を止めてから、丁度十三四歳の頃、初めて幼學便覽を買ひ、詩は斯くくして作るものであると云ふことを教へられました、勿論亡父に教へられましたが、其節亡父の命令には、此の書物にある題目は、必ず順序を逐ふて作らねばならぬ、一題



目にも抜かしてはなりません、又此の書物の中にある、二字と三字とを併して作るのであるが、此の書中に無い字は決して遣かふことはならぬ、と云ふ極々嚴重な命令で有りました、處が最初は五言絶句をのみ、作ることになつたけれども、仲々思ふやうに、其の内にある字のみにては、出来ない處から、極内々で種々のやりくりをした事がある、其れが知れない積りで亡父の處へ出すと、直ぐに露見して、ひどい小言を喰ひました、何んでも古い事だから、ぼんやりと記憶して居りますが、春日歸家と云ふ題にて有つたが、六魚の韻の處で廬の字が有つたが、其の上に置く都合の宜しい文字を探して、二字の方に諸弟と云ふ熟字が有りまして、しんるゐと註をして有りましたのを、是れは幸ひと思ひ、直様諸弟廬として居いた處が、亡父が一見して、こんな字はない筈だと申して、大そう叱咤されました、其處で私は負惜を申すには、いや、こう云ふ熟字が有りましてから、使用致しましたと云つたら、亡父は仲々承知しません、そんな事はない筈だ、有るなら本を持って来て見ると云はれて、本を持つて行くと、勿論有る筈が無いから、又候叱られました、又何か

の詩に、山雁と云ふ字を用ゐたことが有りまして、今から考へて見ると、實に無鉄砲極まる咄で有りますが、子供の自分には、其れで餘程出来したつもりなりました、其故最とすまし込んで、之を持出した處が、其時も矢張り、此様な熟字はない筈だと申して、亡父に叱咤されました、丁度こんな事が二三度も有りまして、書物にない字は、矢鱈に使用してはならないものだ、成程恐ろしきものだど氣が付きました、其れからは何んでも書物の中の字を、運用することに極めました、最初は五言絶句ばかり、一日に三首と云ふ極めでやりましたが、續篇になつてから、七絶二首、五絶一首の割合にて、作りては直して貰ひました、十四才の秋頃、亡師の塾に入ります時まで、まわ書物を離れて詩を作つたことは、御座いませんでした、最も二三度同じ小學校の人々と、詩會をやりました時分に、課題を作つたことは御座いまして、其のときの事でしたが、納涼の絶句に、世説中の一故事を用ゐて置た處が、或先生が申しまするには、未だつかひこなしてはないが、一種妙な處があると、云つて呉れたそうです、畢竟書物に就て其中の文字のみを運用して居るのは、まだるつこい



様では有るが、今になつて考へて見ると、是れは弓を學ぶに藁を射るといつたやうな譯で、是れで稽古をして置かなければ、卒イと云ふ時に的ばかりでは、体のさまらぬ事が有りますから、廻はりくどいやうだが、是れは初學に必用なる事と思ひます、尤も亡父の言聞かせる處では、詩は無用であるけれども、文章は有用であると云ふ主義で教へましたから、既に亡父の詩の中に、かう云ふのが有ります、たしか上州の客中に出來て、口述したのを私が筆記したやうに覺えて居ます、

不願兒曹類スレ乃翁ニ尋章ヲ摘句ヲ悔彫蟲ヲ讀書紙上ニ焚ク眼。

注 向經天緯地中。

かう云ふ風で有りますから、私は中々其頃から、詩人にならうと云ふわけじや有りません、其時は矢張り文章を主として稽古をしたのです、私が十五歳の年の夏、亡父が死去致しましたから、不本意ながら、餘義なく歸國しました處が、田舎の事ですから、文章を作る人は御座いませんでしたが、詩を作る老人が有りましたから、相互に唱和したりする處が、仲々面白くなつて來ましたから、ついで其方にの

み氣を入れて、絶句などを作つたことが多く有りました、勿論田舎の事ですから、参考としたものは、新文詩や、竹外の二十八字詩や、星巖詩集位のものでした、十六歳の年には、少しく考ふることが有りました、何でも律を研究して見やうと思ひこみ、正月早々から無暗に律をやつて見ました、四十字若くは五十六字を並べて、日夜間斷なくやつたから、一日に十首も十五首も作つた事が有ります、中には出來そうもない難題を、無理やり作つて見たりして、丸で絶句は作らずに一ヶ年暮らしました、尤も此の年は郷校に全唐詩のあつたのを、借りて讀んだやうに覺えます、かくして十七年の秋、再び東京に上りました處が、前に申したやうに、若手の連中が盛んに雑誌などを發行して遣つて居るから、二三種其の仲間入をしたことがあります、又二三の人々を訪問して、詩作を訂正してもらつたこともありますが、皆な餘り面白いと思つたことは御座いませんでした、

槐南先生には、先々から御目に掛つたことが有りますから、行き度いことは山々で有つたけれども、少し事情が有りました、暫時見合して居ました處が、小野湖山先



生に遇ふた時に先生の申さるゝには、自分は老体だから、評正などは出来ん、春濤の息子に習ふ方が、宜からうと云ふことであるから、此に始めて決心して、茉莉巷凹處を訪ふて入門したのが私の十九才の年の末か、二十歳の初め頃でした、素より此の時分は、外に仕事がありまして、志を専門にすると云ふ事ではなかつたし、又槐南先生も、多忙であるから、日曜日毎に尋ねて行くことにした、恰も其時分、吳梅村集の講義がある處から、其の仲間に入れて貰ひ、其れを聽いて居つたが、其の仲間には霞庵抱生の二君で有つたが、抱生君は程なく名古屋へ歸りました、後は霞庵君と二人でありました、其時に先生は二十四歳で、霞庵君が三十歳位で有つたと思ひます、この外に臨時に聽きに來た人もありましたが、始終變らずに三四年間、引續いたのは矢張り二人で有つた、處で日曜々々に詩を持って行くと、先生は仲々許して呉れない、イヤ其れは邪道だとか、疎詩だとか、何んだ箇だと云はれて、果ては棒を引かれたり、或は再考を命ぜられたり、するので困憊などは至極嚴重で、評語などは滅多に得ることは出来なかつた、併し今から考て見ると、本統の稽古と云ふの

は、此の時で有つて、一面には古人の詩法を教へて貰ひ、一面には失策の欠點を擧げて貰ひ、而して叱られたのが、何れ程の藥になつたか、何程の利益になつたか、分りません、仲々今時の若いものが出す爲めに造るやうな、其様な氣樂な事はなかつた、併し二三年経過した内に、前年を回顧して、先生に従はない前の詩を出して見ると、三四百も有つたのが、殆んど見るべきものがなくつて、斷乎として之を削つて仕舞ひました、して見ると、先生の御蔭、自分は、知らず／＼の中に、其れ丈け眼が進んで、手も亦幾分か進歩をしたもので有らうと思つて、喜んだとて有りませ、尤も再度上京した時には、政治學を修る爲めに、大學へ這入る積りで、英學をやつて居た處が、父執の爲めに止められて、分けて井上梧陰先生や、島信叔先生の爲めに、勤められて支那の學問をするにはしたか、まだ／＼十分決心する處が無つたが、只だ私が二十一二歳の時に少しく感ずる所がありまして、外の事を一切廢止して、純然たる詩人を以て、自ら任ずるやうにしました、其様すると、其れでは亡父の言に背くやうでは有るが、私は決して詩を以て無用の長物とはなさず、又彫



蟲の小技とは思はずに遣つて居るのです、勿論經天緯地といふ、大袈裟などは出来ぬかも知れぬが、長い間にはまさか、家學を汚す事ばかりでは、無からうと其様期して居ります、

星社の事ですか、星社は今之詩人が一致して、詩道を維持せんが爲め結社したので、其の詩風は固より一ならずです、元來詩を學ぶのに、或は唐とか、或は宋とか、一時代を狙つて、やつたものか、又同代の内にも、誰れを學んで、宜かろうか、又一体何時代頃が、一番初學に適するか、など種々人に問はれますが、私は其の都度に、何時代、又は何人と申して、指定する必用はないと申します、其の理由は、凡そ人は各其の性情の相近い處があるから、其の近い處を搜して、之を學ぶのが、尤も宜しきと考へます、性情の遠いものは、如何程勉強しても、終に其の精神を得ることが出来ない、畢竟するに詩の体裁とか、聲調とか云ふものは、性情を發起するの手段に過ぎないものだから、之を發起するには、各自分の都合の宜しきものを、撰擇するより、仕方がない、尤も最初から何れが適當か、不適當か、分り兼ねるならんけれども、段々少しづつ遣つて行く内には、自分の嗜好と云ふものが、自然と出來て来る、而して成る程と思ふ場合が有つて、追々分かつて來ます、全体唐とか、宋とか、或は元明清とか、區別して居るのは、實に可笑しき咄でありませ、只だ歴史上、時代に分ちたままでのと有りまして、詩の上で申すと、唐には唐の獨得の妙味があり、宋にも亦た特殊の面白味があり、元明亦然り、清朝も亦然りです、之を譬へば高山に岩石が峩々として聳え、雲烟の變幻として極まりなきも、一の景色で有る、また青溟万里窮なき處に、怒濤澎湃たるも、一の景色で有ります、又谷川の潺湲と流るゝ處に、莓苔蒸したる岩上に野花の香ふのも、一の景色なり、茶座敷の傍に石燈籠やら、飛石のまはりにこぼれ松葉の舖ひて有るのも、一の景色であります、其他或は壯活雄大とか、清楚瀟洒とか、或は綺麗とか、適美とか、いづれ種々の變化は有れども、其の一の景色をなして慰むる、人心の點に至ると同一で有ります、自分が壯大の景色が嗜好だと云ふのは、善いが、其れかと云ふて、壯大以外に景色の見るべきものがないと云ふのは、甚だ宜しく御座いませぬ、



又瀟洒が宜しいと申して、瀟洒以外に景色はないとするのも、亦た不可なりです。箇様に種々違つて有るからして、詩も亦た唐は唐、宋は宋、元明清は元明清と、各々其の妙處のあるのを許して、平等に之を見做し、公平に之を論じなくては、本統に詩を論ずるものとは云ふべからず、况んや一箇人にあつても、境遇は朝から晩まで、同一ではない、或は羽織袴で儀式正しくする時も有らう、胡坐をかひて打解けて咄をするときも有らう、浴衣を掛けて酒を呑むときも有らう、其時々で人間の心持が、各々違つて居れば、性情を發揮する詩の体裁も、聲調も、亦た隨て違はねばならぬわけです、田舎に参りまして、心のどかな時には、大禮服を着けて参賀をする様な、心持にはなれまいし、是れと同様に、大禮服を着けて参賀をするときは、田舎に居つて、のどかな心を持つて居る様な、氣にはなれまい、そこで田舎に於て、のどかな氣分で居る時分と、大禮服を着けて、参賀をするときとで、心持が丸で違ふやうに、詩を作る上に於ても、同様兎角まら／＼になります、各々其の場合／＼にて、適當なる詩の聲調、体裁を求めるには、勢必す何の時代とか、誰人の詩集

とか、申して其れを限るわけには、参りません、何でも廣く學び、多く讀むとが宜しいけれども、其れでなくとも、何時の時代とか、何時の何人とか、申して兎角狭い處に、拘泥せぬ様にしないといけません、畢竟詩の境界は頗る廣いから、如何なる体裁にても、如何なる聲調にても、特得の妙所がありて、上手にさへなれば、其れで宜しひ、今不二の山に登るとすれば、洲走から上るも、甲州から登るも、御殿場から登るも、道は異れども、つまる處は、不二の絶頂まで登るのが、目的ですから、必ずしも何方から登らねばならないと、限つたわけでもありません、何方でも都合のよい處から登つて宜しい、詩も其の通りです、何も狭い眼で、兎や角あけつらうのは、我が量のせまいことを披露するものです、此處に尤も面白い咄があります、昔大勢の詩人が打集つて、唐宋の區別を論じましたる處が、議論に花が咲いて、追々八釜敷なつて來たら、其の時座中の一人が天を仰て嘆息しましたから、此の議論の眞最中に、何をそんなに嘆息するのだと尋ねたら、いや唐の時代を今少し延ばして、せめて周の世位繼けたなら宜かつたが、不幸にして周の如く長く参りませんで



した、と申すから、其れは何故かと尋ねると、いや唐の時代が、周の如く八百年も継続したなら、宋も亦た唐の内に屬して居るから、今日の如く、諸君をして是れは唐詩だから宜しい、是れは宋詩だから悪いと、云ふ様な議論を起さしめざりしならんが、と申したそうです、是れは一場の冷語に過ぎないけれども、随分味の有る咄のやうに思はれます、

全体私は古人に於ては、偏嗜なみと自信致しまするゆゑに、此様な風は何んでも宜しいと、常に申します、而して自分で、唐宋皆詩閣と名づけた位です、勿論是れは私の性質であると思はしまして、食物も其れと同様に、是れと云つて、嗜好なものがない替はりに、是れと云ふて、嫌ひのものも有りません、其の理由で有りますから、今の詩人に向つても、此の如き詩風は宜しいとか、此の如き詩風は悪いとか、申すやうなとは致しません、成るべく丈け、其の人々の長所々々を取つて、而して其れで各々性情の近い處をやつて居るのが、尤も宜しいと考へます、處で星社<sup>○</sup>は恰も此の主旨で、成立つたやうなものですから、私は大賛成をして居ります、或

は漢魏六朝の好きな人もあり、唐一點張りもあり、宋元が宜しいと云ふのも有り、明と清とやと、各其の長處を持つて居て、まかも一社の中に居て、詩道の爲めに盡すと云ふは、取り直さず、詩境の廣い所以であります、幸にも星社には槐南先生を始めとして、青崖君なり、種竹君なり、其他澤山の先生方が居つて、多士濟々であるから、互に協心同力して、所謂大同團結をなされ、しかも和して同せずと云ふのは、最も結構なりと申して、私かに喜んで居ます、中にも今申した、槐南先生并に青崖種竹兩君を、或人が三宗とまで推尊した位であるから、各々其の長ずる所を以て、人を導かるゝは、尤も願ふ所です、區別を付けて見れば、三人は三人各々種々の癖が有りました、或は詩を作るのに早い人がある、或は遅い人がある、絶句が嗜好な人があれば、古詩が嗜好な人がある、律が嗜好な人がある、然れども名は言はぬが、作り上げた處で見ると、流石に争はれぬ所があるから、三家と云ふ名目が出来たのでも有らう、然るに或人はかう言ふ事を話した、金銀銅鉄と一口に言ふけれども、金と銀とは大そんな差が有つて、銅鉄銀みな各著るしき差があ



る、其處で金に對する適當のものがあれば、其れを出すか、丁度同一價値のものがな  
いから、止むなく、其處で銀を以て之と並べて、銅鐵も亦た之れに次々のである、  
其故に金銀銅鐵と、一口に並べて申しても、金銀銅鐵みな、同一の價値のものでは  
ない、とかう申したものが有りますが、是れは從來何家々と申しました、其が内  
に力量、學問、才能など、區別して見ると、自から等差がある處から、遂に金銀銅  
鐵の比喩を持出して評したのでありませう、私は今の三家に對して、此の定木を當筈  
ひるのは、だうで有らうかと思つて居ます處から、私は又かういふ三家評を試みた  
事がある、

今日梨園社會に於て有名なる役者は、何者なるかと問はゞ、必先づ指を團十郎若く  
は菊五郎、左團次の三人に屈するでせう、其處で今の三家を役者に喩ふれば、かう  
です、ようございますか、彼の槐南先生が、最初艶体上手で有ると云ふ評が有つた  
處が、今日では段々變化して参りまして、諸体殆んど善くせざるはなしと云ふの  
は、即是れ團十郎が充分に所作を仕込んで、遂に今日の活歴を組織して、兼ね善く

せざるなきは、似て居ります、種竹君の辭藻に富瞻なる上に、如何なる体をも善く  
せざるなきは、恰かも是れ菊五郎が、何時も若々しく、器用にこなすと同一かと思  
はれます、青崖君が特に豪壯なる詩に巧なるは、世評の自から之を許す所で、専ら  
之を以て世に立たれたるのは、左團次が舞蹈の地がなくても、一種荒いと云ふ所を  
以て、一方に雄たるに相似たる所あると思はれます、而して其の詩が主として書生  
間に愛讀せらるゝは、亦た魚河岸の連中が左團次を最負にするのと、最も相似て居  
ると思ひます、之を要するにです、此の三人の俳優は、長ずる所は各々相異なるも、  
今日の名優たるは同一であります、今三家を以て、之れに比較したのは、甚だ失禮  
ではあるけれども、或點は能くも似て居ると、思ひまするがゆゑに、此の譬へを引  
出して、御咄し申したので有ります、處で今日の少年俳優には、随分麒麟兒と云は  
れて、將來望みあるものが多いそうですか、この詩壇の若手にも、これと比較する  
ものが有るか、無いか、何うか一つ充分奮發勉強して、諸先輩をも凌駕するやう  
な、大手腕を有する大家を出すことをば、私は希望して居ります、若し果して其様



云ふ大家が出ました其時は、私共は馬の足なみに、其人の前に平伏して、申上りて  
も言ふより外は、無いと私は日夜思て居るのです、(明治三十二年一月十一日談話筆記)



日下勺水先生漢文話

先生名寬字子梁號勺水下總古河人  
牛込區若宮町十七番地居住東京府士族

凡そ文を作るには、体裁が第一肝腎だ、体裁が間違つた日には文が文にならぬて、  
併し文章はつまり立言に相違ないさ、立言だと仲々軽くは書けないよ、昔時は  
立徳、立功、立言と、かう三つならべて云つたが、さて其の三つの中で、何れが尤も重  
いかと云ふと、どうやら立言らしい、なせかと云ふ理由は、今左に示し、立徳、立功  
立言の比例に付て考ふれば、能く分る、

立徳に付て言へば、君子の澤は五世に盡くと申して、いくら有徳の君子とても、  
二代三代四代位までは、たとひ時代と共にうすらぐとは申せ、其先祖の徳澤がまだ  
存して居るけれども、最早や五代となると、時代が時代だから、流石の有徳君子の  
家も、舊澤盡き果てぬと申したのだ、  
立功に付て言へば、英雄豪傑、若くは其他有爲人物が、一世一代に功名事業をな  
すことは、往々あるも、扱て其の功業は、一世一代限りのものにて、永久傳はるも  
のにあらず、されば其功名事業はたとひ一時に赫々として著しきも、其の後世に傳  
はるの點に至ると、立徳には及ばない、況んや立言に於ておやだ、  
立言に付て言へば、之を前の二つのもの、即ち立徳、立功に比すれば、其の後世  
に傳はるの點に至ると、實に際限なきものさ、どうして仲々至善至美なる文章になる  
と、天地の有ん限りは傳はるよ、國と云ふ境界をも飛越ねて傳はるよ、言葉を替へ  
て云ふと、千万年後にも傳はるでせうよ、千里外にも傳はるでせうよ、是故に文  
章は立言の中に屬するものと心得て間違ないのさ、立言の中に屬するものなら、一



筆一言たりとも重んぜねばならぬ、一筆一言の重んずべきことを知つたならば、仲々油断は出来ない、文を書くものは、決して輕々しく書くものじやあないよ、立言の事に付き、先づ一二の例を擧げて示さん、孔子が「己れの欲せざる所は、之を人に施すこと勿れ」と申すと、耶蘇の法にも、これと同じ意味の言葉、即ち「己れの欲する所、之を人に施せ」と云ふとが有つて、之を金科玉條として居る、だから國が違ふても、學が違ふても、果して宜しき立言なれば他國にまで傳はり、千万年後にも残るよ、立言の極處なる効能は、凡そこんなものさ、徳川家康公が、二代將軍に申した言葉に、將軍は幼少の時分から、學問をして居つたから、能く事物の道理を弁へて居らふが、余は常に戰場に臨みて、城攻め野合戦の事にのみ心を費やしし故、天理人情など能くは存せぬぞ、惟だ至極尤のと思ひ、始終記憶して忘れずに實行した事が、二つ三つ有れば、之を將軍の參考にまで申置かん、

### 第一 譽をば恩を以て報ふる事

### 第二 足るを知るものは常に足る事

右の二ヶ條は、是まで一生行ひ來たと申されたが、此の言甚だ小なるが如しと雖も、東照公天下を取る第一の立脚だ、立言は一時に其の効見はれざるも何時如何なるはづみより、見はれるやも知れんのだ、文章は立言だから立言の文章と思つたら、文章を苟くもせざることは、猶ほ發言を苟くもせざるが如く心得て、飽くまでも立言の責を負はざるべからざるのだ、立言の責を負て書く時は、文章も自然價值あるものが出来るやうになるのだ、「書經に詞尙體要」と云ふとあり、又「易經に修辭立誠」と云ふともあり、いづれも立言の事であるが、苟くも士君子たるものは立言の責を忘れてはならぬ、此の義を始終念頭に浮べるとを要するんだ、

扱て又坊間の書を見ても、文字の書方に注意すべきとがある、是れは普通人の氣の付かぬ處ゆゑ、殊更ら此に話しておかう、人と話の上にては、今日支那と同等とか、對等とか言ふのみならず、日本は支那と戦争の結果、支那に打勝つたゆゑ、日本は遙か支那の上流にあるかの如く考へ居るんだけれども、文字にては却て遙か下



等にあるんだよ、一例を挙げれば、引事に支那を用うる時、司馬温公、范文正公、歐陽公、蘇文忠公など、云ふて、必ず公の字を付ける癖に、日本の諸大臣以上の人なれば、無にする、徳川家康、豊臣秀吉、織田信長諸公は、日本の諸大臣以上の人なれば、無論公の字を付くべき筈なるに、文章にては呼捨てにするとは餘りひどいよ、然るに異朝支那の司馬温公、范文正公、歐陽公などを、丁寧に公の字を付けて文章に書く、また司馬温公、歐陽公、范文正公の三人は、位官も貴ふとければ、宜しとするも、蘇東坡に文忠公など、書いては、餘り丁寧すぎるぢやあないか、是れは畢竟知らぬゆゑとは申すもの、他國人が見たり、聞たりすると、屹度日本は支那の附庸國とか、屬國とか思ふに相違ないて、處が支那では是等の事にちやんと體裁が有つて、そんな日本人の様な亂暴なことは書きませんよ、其處が所謂文字國の文字國たる所以さ、日本人のやうに、どうも法則もなく、分別もなく、無暗矢鱈に書いた日には、附庸國、屬國など、思はれて、第一國の體面を汚すものだ、是等畢竟文字を用うる體裁を知らぬゆゑだ、近來は書物の表題すら、此の間違があるんだから、大

にこの弊を矯めざるべからずと思つて居るけれども、世間では一向平氣に構へて、之を問ふものがないやうだ、實に困つたものだ、



佐々木信綱大人歌話

磯竹柏園主人伊勢國庄野人  
當時神田小川町一番地居住

扱て和歌を學びますには、二種の方法があります、即ち自ら作ると、古人の歌什を熟讀玩味すると、此の二種に分ちました處で、扱又之を學ぶのに、時代の近い處か、時代の遠い處か、と云ふ問ひが起ります、古今集二十一代の中、代も久しく、歌も多いから、何れの代が善いか、何れの歌が宜しいか、撰擇せねばならぬ、撰擇は實に大切です、然れば便宜上其の撰擇を分ちて、又二種と致します、



第一 勅撰

第二 撰集

この二種中、又各々其の特色と、別調とが有りますが、其の趣の因て異なる處は、只だ勅撰と申すと、多くは是れ優美平板にして、圓轉なる趣向のみ、と云ふが如き傾きが有ります、之れに反して、撰集には鬱勃憤憤にして圭角あり、而して天真爛漫たる姿致が有ります、

其處で撰集の方では、西行の山家集や、實朝の金槐集、近世では、眞淵の加茂翁家集、加納諸平の柿園詠草、香川景樹の桂園一枝などが宜しいやうです、山家集と金槐集とを比較して、論じて見れば各々長所があります、心の高尚と云ふ點より申すと、西行の山家集で、勢の壯烈なる方より申すと、實朝の金槐集で有ります、

貫之躬恒等は自ら撰集せずして、後世の人が集めたもの、やうに思はれますが、何うも人の撰集したものはいけません、斑になつて困ります、だから是非とも自撰に限ります、其故此の點から云ふと、西行に若くものはありませぬ、和歌は是非と

も心と調と詞と、かう三つ相一致せざるべからず、この三つ相一致したものをば、

姿と申しますが、其の姿の中には、自分の氣に合ふものと、合はぬものとが有ること、は、到底免るべからざる數ですから、宜しく先づ其の我が氣に合ふものに向つてすゝみ、其の趣向を學ぶやうにするが宜しい、其の最初真似て居る内は、似付ざるやうなれども、愈々真似れば、いよいよ真に似たものが出來てくる、して携せず屈せず、間斷なくやつて居る内には、知らずく自然と我手に入ります、手に入つたら、最早や此方のもので、其までの辛抱が大切です、

和歌は自分の思想を述るものなるがゆゑに、決して一つの模型に入れて、之れを論ずべきものではありません、總て歌は境遇に因て異なり、感情に因て殊なるもので、其故に忽ちにして悲憤、忽ちにして勇猛、忽ちにして優和の姿をあらはします、斯く同一の人にしてさへ、變化するとすれば、況んや性情の相異なる、他人に於ては尙更らのことです、又況んや時代の相異なる、古人に於ては勿論のことです、

作歌法の御尋ねですが、作歌法は私も歌の衆と云ふ書物を拵へていただきましたが、是



れで宜しいか悪いか、自分の作りし書物の事を、自分の口からは申されませぬゆゑ、此の事は姑らく預りおくことと致しまして、落合さんの物されました、新撰歌典や鈴木重胤さんの物されました、和歌うひまなびなどが宜しう御座ります、故人に井上文雄と云ふ歌人がありました、此人は餘程の大家として見上げて宜しう御座います、まだ世間では一向存じませぬ、どうも氣の毒ぢやあ御座いませぬか、昨日も追悼祭を行ひました處が、會合した人数が、漸く二十名ばかりでした、此の大家の追悼祭に、僅々斯かる少人数で有つたと聞いた人の中には、定めし井上文雄先生が、徳低く才拙き所以の證據なるべしと、即断するやがらも有りぬべしと雖ども、是れ全く名人の割合に、世人が知らぬゆゑで有りますが、詩歌文章などは、生存中に著はれるか、歿後に至りて著はれるか、後代に至りて著はれるか、實に其の邊は分りませぬ、果して大家にして、其名吟が有るなれば、苟くも言葉の通ふ世界や、文章の通用する場所へは、千里の先々までも聞えませう、千代八千代の後までも傳はりませうよ、又歌の長さ短さは、兎もあれ、其の果して磨滅すべからざる程

の、理窟が有るなれば、之を外つ國の文や詩に翻譯して、其の意味を玩味することも出来ず、井上文雄翁が小傳、及び其の詠草は、左の如し、

## 井上文雄小傳

井上文雄は、岸本由豆流の門人にして、通稱を玄眞と云ふ、柯堂は其の號なり、又別號を歌堂又は調鶴と云ふ、江戸の人にして、田安家の侍醫たり、初め岸本由豆流の門に入りて、和學を修め、後又一柳千古に従ふ、其の特に勝れたるは歌文にして、景樹以來の名人なりと稱せらるると云ふ、明治四年十一月八日歿す、行年七十一、谷中玉林寺に葬る、法名文雄院歌先明道と云ふ、其の歌例を示さば左の如し

## ○勤學

あさ夕に倦まず、いそがず、おこたらず、

學びのあしは、行くべかりけり

## ○辭世の歌に



老果て、命惜しとは、思はねど、

死なむと云へば、かなしかりけり、

○像贊 此時文雄六十八歳なり

ふらぎよき、大和心を、心にて、

よそにはさかぬ、花櫻かな、

○入牢歌

行末の、たのみも今は、なかりけり、

君が千代田を、よそにかられて、

○金銭花

この葉を、摘采るやとは、物もなし、

黄金の錢の、花ばかりして、

右は不思議にも、金銭花を植ゑし其晩、泥捧這入りて、金銭を請求するゆゑ、文

雄先生取敢ずこの歌を讀みて示し、に、こは兼て承知せし、井上大先生の家なり

とて、其のまゝ逃げ去りぬ、

(明治三十一年十月二十二日談話筆記)



### 木村正辭老大人歌話

大人通稱莊之助、字初名地蔵、後改兩谷、號別號三替木山人、集古葉堂、珠經屋、三十二州庵、慈京都妙法院宮家臣、下谷區入谷町三十五番他居住

今日この雨後泥濘の處を、遙々この下谷の隅まで御出掛に成つて、歌道の事を御質問とは、實に御熱心の事です、折角の御出ですから、詠歌の事を申上げる積りで有りますが、扱て之を申上ぐる前に當つて、豫め御断り申上置き度き一條は、外では有りませぬが、私は詠歌は至て下手の方で有りますから、宜しき歌を詠む方法を申上ぐるなどの事は出来ませんが、唯だ學術上から聊か思出のまゝを、述べて見やうと思ふので有りまして、決して歌道の方針を示すとか、改良意見を述べるとか云ふやうな、確乎とした議論では御座いませぬ、先づ申さば御尋ねが有りましたに就



て、御相談を致しまする位の積りで有ります、

### 歌の學問

是より歌の學問即ち歌學の必要なる所以を申しませう、和歌は我が御國の手振りであるから、此御國に生れた人々は、何人でも自然に詠むことが出来る道理であります、處が世を経るに随つて、人の物いひも段々訛りになまつて來たから、歌言葉と常の物言ひとは、甚だ異なるものとなりました、其故歌を讀まうとすれば、先づ所謂雅言と云ふものを調べて掛らねばならぬ、雅言を心得ぬとさば到底歌讀むことが出来ませぬ、して其の雅言を知るには、廣く古歌古文を味ひ試みざれば知ることが出来ませぬ、是故に中世以後は、歌道の宗匠など云ふことが起つて參りまして、其の讀み方の心得や、又其れを物にしるすに付けての法則なども、其の家々によつて掟と云ふものが出來て居まして、歌合の式などさへ定めたと云ふ位ですから、第一其邊の事を詳らに承知をして居らぬといけませぬ、其れを知らずしては折角自ら詠み出でたる歌も物にしるすことが出来ませぬ、又會席などに到ることも出来ませぬ

ぬ處から、やうく斯道の學と云ふことも起つて來ました、また和歌に制の詞など云ふことを設けて、古人の名歌に見わたる詞は禁制して、妄りに使用させぬと云ふことがあります、今一例を擧げて申さば、ほのくくと云ふ詞は人麿朝臣の歌で（實は人麿の歌に非れども世間普通の説に就て云ふ）殊に名歌であるから、ほのくくと云ふ詞は、初句に用ゐてはならぬなど云ふことがありますが、一体自由自在に人々の思想を寫すべし此の和歌にまで餘計な柵を設けて、進歩の道を遮ぎるとは愚の至りと申すものです、

此の時代には、古へに遡つて詞のもとなどを考究すると云ふことはなくつて、各々私意臆測を以て、恣まに古言古意を解釋する處から、當らぬ事のみ多くして、適當の事は却て少なかつた、と云ふ始末でした、加之ならず第一假名遣さへ亂れて、これを整頓する方法も附かざりしを、元祿年間灘波の高津に圓珠庵契冲阿闍梨と云ふ人が有りまして、大に之を慨嘆し、其の亂れにみだれたる古言をば、多くの古書をも攷へわたして、假名の用格を訂してから、それに次で荷田東磨翁、加茂真淵翁、本居宣



長翁などいふ人々出で、其の明め難きを明かし、其の正しからぬを正し、其の謬ま  
れるを改め、其の短さを補ひ、其の長さを絶ちなど致したるとなれば、此に至て面  
目一新、實に歌學世界の別天地とも云ふべき程になりました、是を以て之を考ふれ  
ば、契沖、荷田、加茂、本居など云ふ人々を、歌學社會の一大湖水と見立つれば、此  
の時代以前の歌流は、悉く淺りて斯の大湖水に入り、此の時代以後の歌流は亦悉く  
溢れて此の大湖水より出でしものです、其れゆゑ今では其人たちが、折角苦心勞力  
して之を明かにし、之を正うし、之を改め、之を補ひ、之を絶ちなど致したること  
どもを知らずしては、よき歌は詠みがたき事にて、よき和歌を詠まんと欲すれば、  
必らず先づ此の邊の研究が必要で有ります、如何なる歌詠む人でも、歌よむから  
は、よき歌を讀み出さうと思ふに相違有りませぬ、よき歌を讀むには、是非とも是  
等の歌に關することを學ばねばならぬ、其處で歌學と云ふことが、甚だ必要になつて  
來ましたので有ります、其故に吾々の社會にては蚤とに此人たちの教を承繼ぎて、  
間斷なく之を講究し、未だ會て怠慢荒廢せざりしが、之れに引替へ雲井高き御わた

りには、猶かの中世以來の仕來りを堅く守り給ひて有りしが、是れも明治の御代の  
始めよりは、其の訛なるよしを知らしめして、古へのまことの筋に返へし給ひしは、  
吾々の喜びは素よりにて、大御國の御手ぶりの御光は、是れより外つ國までも輝き  
渡ることで有りませうと思ひます、意に目出度きことで有ります、

歌は神代よりのものなれ共、上古は文字の數の定りもなく、事柄の長さは長く歌  
ひ、短さはみじかく歌つたことですが、この長歌短歌の外に片歌と云ふものが有ります  
す、この片歌と云ふものは、五七七にて一うたとするもので有ります、又旋頭歌と  
云ふものが有りますが、これは五七七五七七と重ねて、一うたとするので有ります、  
然れども此の歌は、調べのたより宜しからざるゆゑにや、其の歌どもの今の世に傳は  
りたるもの甚だ稀れで、長歌短歌の如く多くは有りませぬ、總べて物は優勝劣敗の  
原則に洩れぬとて、彼の歌も矢張り左様です、三十一文字の歌の古も今も多く人の  
讀めるは、必ず比較的其の調べの他の歌に勝れて、よき處が有る故で有ります、  
長歌は萬葉時代の歌を以て勝れたりとするも、扱て、之を學ばうとするには、仲々



百  
どうして容易の業では有りませぬ、是故に後世古今集以後の調を學ぶものがあつても、其の多からざる理由は、全く其の調の劣つて居る故で有ります、古今集以後の長歌は、今様体の調でけすから、どうも雄壯活潑の氣韻に乏しく、女々しくして皇國の御手振として、後世に傳ふるには、適當しませぬ、又短歌と雖ども、萬葉時代の歌には、至て勢の有るものが有りまして此時代の歌の如きは、甚だ雄壯活潑なる語氣に富んで居ります、今其の一つ二つを擧げて云はんには、和銅元年元明天皇の御製に

ますらをの柄の音すなりものゝふの

大臣楯立らしも

御名部皇女奉和御歌

吾大王ものなおぼしと皇神の

つぎてたまへる吾なけなくに

是れは此の時陸奥越後の蝦夷どもが叛きたればとて、明年前手を立てらるべしによ

り、其前年即ち和銅元年其御軍の訓練をする節、其の矢さけびの音を宮中にて聞召され、大御心を惱まされ給へるによりての御製にて、柄の音の聞ゆるは、定めし是れ今や諸將が弓を射楯を立て、訓練をするならむとの御意にて、天皇御即位の初より、かゝる凶事の有ることを嘆かせたまひての御製なり、又御名部皇女の和奉りし歌の意は、吾大王には物思ひたまふことなかれ、幸はひに皇祖神たちの御魂たまひて、君につぎて吾もあることなれば、如何なることありとも、吾あらんかぎりは、決して御心配は懸くまじきとの御意で有ります、此は女帝と皇女との御贈答たるに過ぎざれども、男子も及ばざる程雄壯活潑なる御歌であります、これを以ても後世の御歌の柔弱なる女々しき姿なるは、皇國固有の御手振にあらざる事が知られます、又舍人娘子の伊勢國圓形浦にて詠みたる歌に

ますらをのさつ矢手ばさみ立向ひ

射る圓形は見るにさやけし



はめたるのみに過ぎざれども、扱て其の序に用ゐたる詞のいかにも雄壯活潑なるに  
よりて、一首の意爲めに引立ち、雄々しく聞ゆるので有ります、以上皆婦人の歌で  
有りますが、其れすら此の如き雄壯活潑でありまして、後の世の男子も及びかねる  
程で有りますから、其餘は推して知るべきとす、

歌の調を變化せんとするもの、説を駁す

斯くて近き頃は、歌の調を變化して更らに斬新にせんとする輩が有りますが、其説に  
曰く、すべて物は世と共に移り變るが常なれば、ひとり歌のみ古を慕ひて、古人の  
口眞似をせんとするは、抑も愚の極と云ふべし、又當今聞きなれぬ詞などを無暗矢  
鱈に並べ立て、僅かに同輩同士の遊びものとするを云ふとは、如何にも遺憾千萬な  
ることなり、其れよりも一般の人にもよくわかりて聞取れる様に、今様の俗語又は西  
洋語なども交へて詠みならふべし、若し然らずして、これまでの調を以て人々に  
詠み出るものとするときは、同じ三十一文字のととて、古人の歌なるか、今人の歌  
なるか、毫も辨へがたきものが出来べしと云ふとす、

これは一理あることの様ですけれども、今時の人はいくら古言又は中古の詞を以て  
作りたりとて、争で今時の和歌と、古代又は中古の和歌と差別の出来ざるべき、其  
の理由は歌には一種特別なる、時代の調子と云ふものが有りまして、いかに古言を並  
べて作れるも、見る人が見ると、ちやんと其の時代々の調は、一吟して明かに知  
らるゝものですから、古言又は中古の言葉を以て、つゞりたればとて、古人の歌と  
まざるゝことのない筈です、試に其の時代々の歌を見れば、一番早わかりがす  
る、今古事記日本書紀などに出たる歌を見ると、おのづから其の時代の風調が有つ  
て、萬葉集以下の歌と混ざることが出来ません、但し萬葉の歌のまぎれて、古今集  
に入りたるが有りますが、稀れには見分けがたきものも有りますけれども、其れも  
能く注意して見れば、猶ほ其の時代のものではないと云ふことは能く分ります、  
古今以下も後撰集は後撰集時代、拾遺集は拾遺集時代と、各々其の時代々の調へ  
がありまして、たとひ詞は同じきも、其の趣きに至ると、自然異なるもので有りま  
す、此の如く其の時代々々によりて、一つ習慣と云ふものが有りまして、決してま



がふべきものでは有りませぬ、新古今の頃の歌は、殊更らに其の調べを異にした様にも見えませぬけれども、是れも言ひつむれば、時代の風調なんです、又詞華金葉のたぐひに至りましても、又たのく其の調を別にして居ります、」

故に此の歌の調子を風化一變する事は、到底唯一の學理上、所謂議論的の説を以てすることば、出來得べきことにあらず、又歌の調べは決して議論にて、風化せらるべきものでは有りませぬ、試におもひ玉へ、日本書紀、古事記の歌は暫くおき、萬葉時代にて古くは人麿、赤人、また金村などいへる名人たちの輩出したるが爲め、其の感化力によりて、知らず／＼自然に同化せられたるもので有りませう、又少し後に至りまして、大伴旅人、家持などの流に化せられたるものも有りませう、其れより古今時代にては、貫之、躬恒の如き、新古今時代にては、定家、家隆の如き、皆一代を風靡すべき程の、感化力を持つて居つたのです、

斯る次第柄なれば、歌の調を一變することの、學問上から論じたる丈にては、とても出來ませぬ、之を風化するは、世間に絶倫なる歌の上手が有りまして、人々自からこれに感ずるの餘り、期せずして自然と其れに化せらるゝので有ります、近代の人で縣居翁は、學問もすぐれて其上歌も甚だ上手で有つたゆゑに、其の時代の人は、多く翁の調べを學びうつしました、其後京都の景樹と云ふ人が出た、此人は學問は無つたが、詠み歌は甚だ上手で有つた、其故に一時はこれに風化せられたる、歌人が多くありました、鈴屋翁は此頃にありて獨り新古今の風を慕ひて學び詠じ、又門人などにも此風をすゝめたりといへども、惜むべし此人學問は古今獨歩にて比類なきも、詠歌の方はあまり上手ではなかつた、其故に歌は此の風が世に流行致しませぬでした、斯く段々理由を申述べました通りで和歌は單に學理的のみにては、到底ゆかぬと云ふことが能く分ります、

俗談常語を以て歌とす可からず

此の歌の事に就て、一の論者が有りまして、かの古言などを用ゐて、今の人にき、とれぬ歌を詠まんよりは、寧ろ俗譚常語を以て、誰にも彼れにも、直に分るやうな和歌を詠むが宜しい、もと和歌は詠人の意を、他人に通ずるわざであるからは、成



丈能く分かりやすきを趣旨とすべしと申すことであります。

これも一應は尤もなるやうでは有りますけれども、仔細に考へますれば、大に否らざるものが有ります、凡そ其の常語と云ふものは、國によりてことなるものなれば、例へば奥羽の人、又は薩人などの常語をもつよりたる時は、他國の人には聞き取れぬ事が多く有ります、彼の發句と云ふものには、此の俗談常語を用ゐること有りますれば、僅々元祿享保時代の發句にても、其時代の常語又は流行詞をしらざる時には、到底解し得ぬことのみ多いのであります、上古の歌は學問したる上ならでは、解する事が出来ませぬけれども、元祿享保頃の人の詠んだ歌は、さのみ解し得ぬと云ふことはないが、これと云ふも詞の使用上に、ちやんと法則の有るのと、其の用ゐましたる詞の正しきとによるので有ります、然れども古へと雖ども、必ずしも正しい詞のみを、用ゐたのでは有りませぬ、或は字音語或は佛語などを用ゐましたのが既に万葉集の頃より有ります、今其の例一二つを出して示さんに

万葉集卷十六に

池神の力士儻かも白鷺の杵啄持て飛わたるらん

とあるが力士は字音にて佛の名なり、これは白鷺の木の枝を食へたる形を力士が鉢を持ちたるに譬へたるなり

池田朝臣嗤大神朝臣奥守歌に

寺々の女餓鬼申く大神の男餓鬼たばりて其子生はん

とあり、これは大神奥守といふ人が、疲れたるを嗤りたるにて、それを餓鬼に見なして、女の餓鬼が其人を給はりて、吾が夫として子を生またらば、よき餓鬼が生れんといふ意なり、又

此頃の吾戀力記し集め功に申さは五位の冠

功も五位も字音なり、これは戀の歌にて、其人が情慾に力めたることを記し集めて、其功を朝廷へ申し上げたならば、御賞に預りて、五位の爵を給はるならんとして、戯れに讀んだのです、此他檀越（佛寺の檀那の事なり）波羅門（印度の士族やうのものなり）などの語を詠んだ歌があります、是等は後世申しまする狂歌と云ふも



の、類であります、斯る次第で有りますれば、今時も名詞は字音語又は西洋語と雖ども、其儘によみ入れても聊か差支のないわけです、然れども歌はもと喜怒哀樂の情より發するもので有りますれば、凡そ歌を讀むときには、自からも心をはらし、聞く人も亦た感すべきやうにするもので有りますれば、此處に心を用ゐざれば、歌にはなりません、後世の狂歌に

引窓を引わすれたか南無三寶荒神松にかゝる白雪

また

さわらびがにぎりこぶしをふりたて、山の横づら春風ぞふく

など有るを御覽なさい、此の歌を詠んだとて、誰人も何の感じも起しません、之れに反して小澤芦庵といふ人が、三百文の錢の入用が有つたとき、生憎其の錢の蓄へがなかつたから、餘儀なく隣り裏なる知人のもとに至りて、これを借用して、其用をすましたる時の歌に

悔しくも難波のあしのみづをなみこと浦かけてからしつるかも

とよめりどろ、此歌三百文の錢なくして、借りて用を辨じたるが如き、卑賤の事柄の歌とは思はれず、

又古歌をうまく取て詠める事あり、業平朝臣の歌に

あかなくにまたさも月のかくるゝか

山端にげていれずもあらなん

と讀みたるは、誠に面白き歌なり、これは山の端にかたぶく月ををしみて、山がいつれへかにげのきて、今宵の月かけを入れぬやうに有り度いものなり、との意です、此歌の出處は、万葉集なる人麿朝臣が、任國に妻をおきて、自からは京に上る時、其の妻の別れを惜みたる長歌の終りの句に、妹が門見む靡け此山、といへる句をうまくとりて、活用したるなり、此の人麿朝臣の靡け此の山と云へる其の詞の雄壯なることは、仲々後人のかけても、及びがたき調で有ります、然るを業平が之をうまく取りて詞をなだらめ、且月の歌によみなしたとは、實に手際なりと云ふべきものです、これらの振合に依て考ふれば、歌は詞と調とを撰ぶべきことの必用が分かります、



又發句と云ふものは、歌よりは感覺の薄きものなれども、芭蕉の句に

古池やかはづ飛びこむ水の音

とあるは、何となく人げなき所の池の、寂寞としたるおもむきが、ありくんと眼前に浮ぶが如き感が有りまして、いかにも淋しき池の邊に、不意に蛙の飛びこんだる音のしたのに驚いて、時節に感じたるけしきが見えまして、實によき句と存じます、又かの其角の句にて有名なる

夕立や田をみめぐりの神ならば

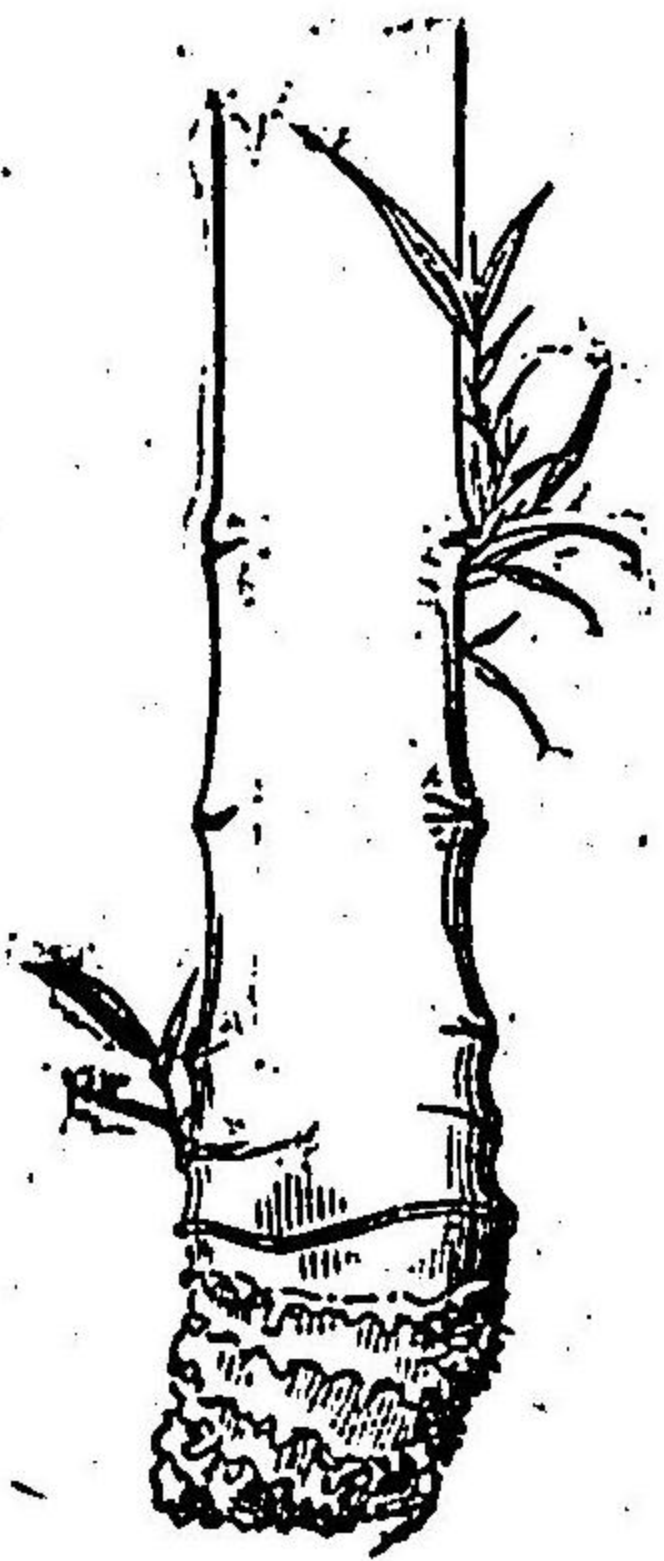
とあるは、此の句によりてみめぐりの神の感じ給ひて、雨を降らせたとの言傳が有りますが、是れば餘り感服したる句では有りませぬ、其上「夕立や」にては、一句調はざるやうに思ひます、其故に馬琴は此句は「夕たてや」と讀むべしと云つて、之れを助けなければ、どうも、譬ひ、たすけられたりして、猶語意は不完全にして、整はざるやうに考へます、然るを神がこの句に感じて、雨を降らせたと云ふが、して見ると、神の御心ばかり恠しいものは有りませぬ、

以上論じたるが如くで有りますれば、歌は能く其の詞をえらび、其の調べを吟味すべきことで有ります、只だ誰れにも能くわかるやうにとて、詞の佳悪をも撰ばず、調べの整否をも訂さずして讀むときは、恰かもかの土佐日記なる舟子の歌の如くに成りまして、到底歌にはなりませぬから、其邊の注意は實に大切です、

終りに臨んで、一言申置きますが、我邦の歌は支那の詩と同様のものでは有りますが、國人には至て必要なものです、支那の詩は學問の爲めに、格別必要のものでは有りませぬ、其故に孔子も之れをば戒しめられし事があります、日本の歌は國學專門の人はもとより、普通の國語國文を學ばんと欲するものにも、片時も欠くべからざる必要のものであります、何とならば我が邦の書籍は文學こそ支那字を假用したれ、其の義は我國の詞を知らざれば、到底解すること能はざるものです、古事記日本書紀の如きも、書中に載せたる歌の數は、實に幾百首も有りませう、而して其の歌に就て事實を講究せざれば、上古の事柄は決して知ることが出来ませぬ、其の他物名と雖ども、邦語を解せざるときは、其の意味を理解することが出来ぬ、又萬葉



集は一の活歴史として、見るべき書物で有りますのに、二十卷盡くみな和歌をのみ集めたるものですから、古言を知らざれば、是れ亦た一言一物の事と雖も知ることも出来ませぬ、故に之を知らうと思つたら、先づ第一番に和歌を能くならふに若くはないのです、凡そ古言雅言は常に自ら使ひ試みざれば、其意味も能く辨へ難いことです、其故に和歌は國文國語の學に於て欠くべからざるものであります、



重野成齋老先生漢文話

先生名安傳字士德號成齋薩州鹿見島人  
 神田區駿河臺袋町一番地居住

文の話と云つた處で、範圍が廣い、實に遡然たるやうだが、併し其れが一斑を播摘

んで、話をすれば話の出来んとはない、先づ文章を作るには、諸誦が第一と、何を諸誦するのが、第一だと申せば、無論文章を諸誦するのだが、其の文章は即ち古人の文章で、其の古人の文章と云つても、飛放れた名文とか、又非常に自分が、嗜好な文章でない、諸誦をするのに、面白くない、面白くないと諸誦が出来ない、諸誦が出来ないと、直に忘れてしまふ、先づ文章軌範や、八大家文讀本中にある文章なら、撰抜いて有るから、何れでも宜しい、其の内で自分の氣に入つた、文章を諸誦するとして、少くとも二十篇位は、諸誦しなくては、文章は出来ない、其の位諸誦すると、自然に文章の調子を覺ゆる様になる、空ですらくやれる位まで諸誦するのだ、これは惟だ漢文を作る上のみ、左様致すにはあらず、和歌を學ぶのにも詩を學ぶのにも、矢張り此の法が肝腎だ、

元祿享保の頃に、雨森芳洲と云ふ老人が有つたが、此の老人は、對州の産で、固より漢學者であつたが、八十一の高齡になつてから、和歌を讀み初めた、處が仲々の根氣もの故、二ヶ年の内に、古今集を千遍くり返へし、又一ヶ年にて、一万首の歌を

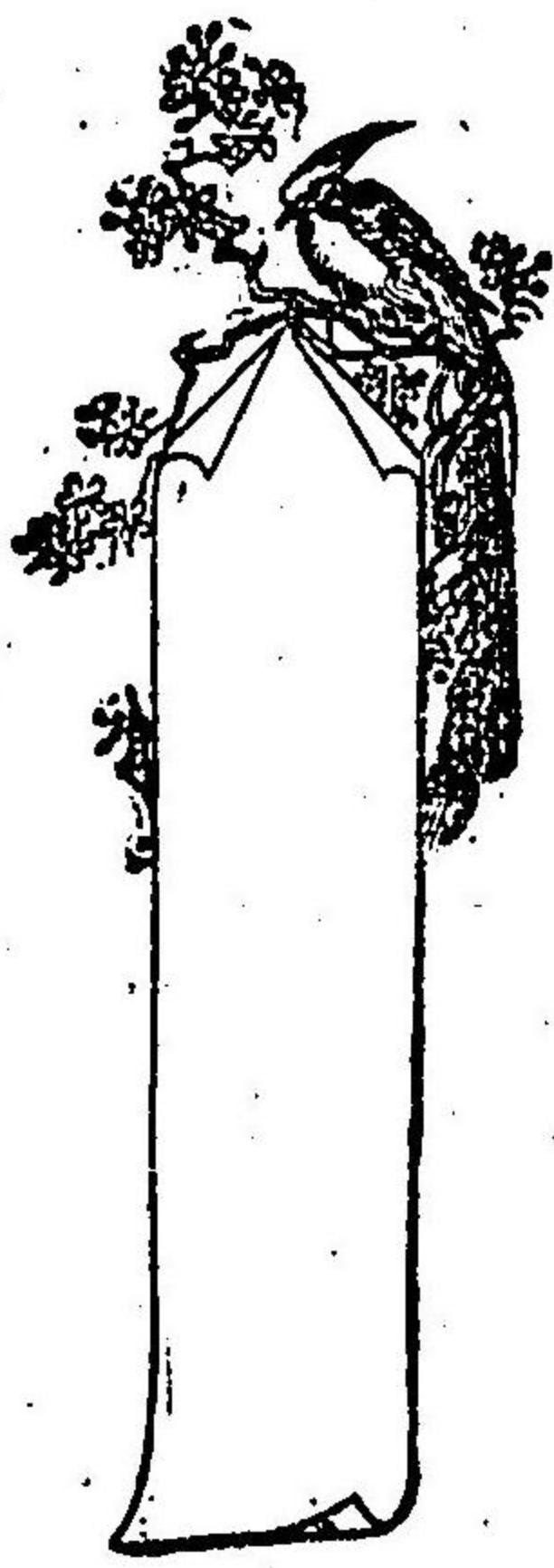


讀んだ、古人が「精神一到何事不成」と云ふた通り、八十一の老人でさへ、斯く精神を置て、本氣に稽古をすると、其の進歩が著るしい、だに依つて、若い者が勇氣を鼓して、本氣に成つて掛れば、文章と云へ、詩と云へ、和歌と云へ、必ず進歩するに相違ないが、其までやらずに生呑込で、廢すから終に我が物とならずに畢るのだ、支那では古き時代より、科擧の法が出来て居り、場屋で考試が有るときなどは、必ず諳誦して居らぬと落第するのだから、支那人は其習慣で、能く諳誦をするが、蘆谷宥陰なども、若い時には、四十篇、若くは五十篇位、諳誦して居つたから、晩年に及んでも、尙ほ二三十篇位は、忘れないとの話であつた、文章の作り初めに、諳誦を第一とするが、其の諳誦をした文章を自分で書いて見て、之を原文に照して見ると、字句の顛倒や、文字の異同等が能く分る、そう云ふ風に、幾回も繰返へして、諳誦をして書き、書いては原文に照して見ると、稽古のつむに連れて、次第々に進歩するものだ、其處で古人も云ふた通り、多讀、多作、多改とて何んでも多く讀み、多く作り、多

く改めるのが肝腎だ、いくら多く讀んでも、多く作らぬときは、筆の運ばぬものだ、いくら多く作つても、多く改めぬときは、名文の出来ぬものだ、姚姬傳の語に觀覽は汎博なるを要すと有るものは、即ち多く讀むことを云ふたのだ、併しいくら多く讀んでも、手本として學ぶ文は、澤山はない、少きを要するのだ、近頃の漢文を書く若い者は、どうも皆な綺麗な、派手な、文章をのみ、貴ぶけれども、いくら惟た綺麗だ、派手だからと云つても、肝腎な道理を根にして、云はぬときは、文章に力がなくて、眞の漢文にはならぬ、たゞ言ひ廻はしを上手にして、飾るのみにては到底意味が浅い、文と云ふ字は、かざると云ふ義なれども、道理が骨に成つて居らぬといけない、文章と詩とは丸で違ふから、其の心得で、やるがよい、詩は花鳥風月の吟だから、左程澤山の書物を讀まずとも、又道理を骨にせずとも、宜しいけれども、文章になると、經書や歴史を根據とするは、勿論、其の他言ふべき事が、腹中になければ、書けるものではない、そうして自分の文章は、自分で添削取捨の出来る丈け手を入れて、最う此の上に手の入れ處がないと思ふとき、



始めて他人の添削を乞ふべきものだ、其れに碌々考へもせず、生ナマ錬の文章を人の前に突出して、猥りに添削を乞ふては、作り直してもらう様なもので、眞の益にはならぬ、多く考へ、多く改める面倒を省きて直に他人の添削を受けるは、樂は樂なれども、修練の方にははづれる、文を作るものは、能く注意すべき處だ



### 本居豊穎老大人歌話

號秋之屋伊勢國松坂人  
牛込區小川町一丁目八番地居住

世の中には既に歌道に關したる、著作も澤山あり、名家の演説も、處々に在りましたから、其の道に熱心な人には、能く御承知のことと存じますが、併し名家の演説、又は講話に、大同小異の有るとは免れませんが、現に皇典講究所の講演中、歌道に關し

たることを演べられたるは、黒川大人の和歌所の考と、木村大人の詠歌論との二種有りまして、孰れも精しく、且つ面白く御座います、木村大人は自から申されました通り、和歌は専門の方ぢやありませんが、彼の詠歌論に申されました事柄は、悉皆正確の事ですから、拙者も至極御同感です、且つ詠歌の事は、右にて大体盡きたる様に存じますれば、其等を御覽下されば、歌道の荒増しは、御分りに相成ることと存じますが、拙者にも是非とも、歌話を致せとの御注文なれば、別に珍らしき説も御座いませぬが、家學と愚見とを演べても、差支は有りません、去りながら彼是れ轉倒錯雜等の事があつては、却つて、面倒を來す憂がありますから、便宜上目録を立て置て、順次に演べると致しませう。

#### 第一 歌の本意

#### 第二 歌の沿革

#### 第三 歌の學問

#### 第四 詞の學問



第五 詠歌の心得

右の通り目を立て置き次第に講じ去るときには、講ずる者も講じ易い、聴く者も聞取り易いと考へますから、假りに斯く順序を立てました、其の積りで聴いて下さい

○歌の本意

歌と云ふものは、今更ら拙者の口から、物奇らしさうに申さずとも、古人が已に吾人に先つて、吾人の申さうと思つた事柄を、言盡して仕舞ひました、ですから一方から申すと、吾人が折角申さうと思つた事柄をば、皆な已に言盡されたと云ふ日には、吾人の云ふべき事柄が、最早やなくつて、吾人の思想は、古人に奪はれ、吾人の言葉は、古人に言はれて、何となく手持無沙汰の様で、後に生れた人程、損の様な考へが、起るかも知れませぬが、又一方から考へますと、人の此の世に在る以上は、始終無事で居る理由には参りません、始終同一の考へで居る譯にも参りません、身上に變動が有りませすれば、必ず逸樂とか、苦痛とかが来る、心情の上に變動

が有りますれば、必ず悲哀とか、歡喜とかが来るものです、其の他時勢の變遷、四時の移易等、凡そ之を小にしては、一身上のことより、之を大にしては、天地万物に至るまで、吾人の意思言行に關せざるはなし、吾人の意思言行に關するものは、必ず心に感じて言に形はれます、言葉に形はれたものを、文字に寫すのが、即ち歌なんですから、言葉は心の聲でありまして、歌は言葉の影です、して見ると、天地万物から、一身上の悲哀歡樂吉凶禍福に至るまで、悉く歌の材料ならざるはなしです、且つ古人が種々に言盡した事柄をば、皆な集めて之を咬んで、碎いて腹で調合して、新規の品と致して、更らに披露するのは、後の世に生れた者の得ですよ、決して損などは有りません、それに古人が早已に言盡したから、吾人の言ふべき事がないなどは、以ての外の事です、そこで歌の材料は、澤山有り過ぎる、吾人は耳以て聴き、目以て視る、事みな歌となるべき證據を、一つ確かに擧げて見ませう、即ち古今集の眞名序に

人之在レ世、不能ニ無爲ニ思慮易レ遷、哀樂相變、感生ニ於志ニ詠形ニ於言ニ、是以逸者其聲



樂、怨者其吟悲、可以述、懷、可以發、憤、

と記して有ります、又かなの序にも、

世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、さくものにつけて、いひ出せるなり、

と有るが如く、元來歌は喜怒哀樂の情より起るもので、感慨の餘り、自然と言に顯はれて、詠吟となるものですが、扱て詠吟となるには、自然言語の長短緩急が有りまして、決して勝手氣儘に、詞を並べるものぢやありません、唯だ耳以て之を聴き、目以て之を視、鼻以て之を嗅ぎ、口以て之を味ひ、皮膚以て之を感じ、所謂五官の働きにて、自然感情の興るものです、此の感情即ち歌となるものです、是れ歌の徳なり、其の感情の動いて歌に發するもの、内にて、天地をも撼し、鬼神をも感せしめ、怒るものをして和らがしめ、哀しむものをして喜ばしめ、笑ふものをして忽ち泣かしめ、樂しむものをして忽ち悲しましむもの、妙力を有するものが有ります、僅かに三十一文字とは申すもの、精神を籠めて作り上げた歌は、どうです、其位

まで力量が有ります、歌の此の位にまで、至らざるものは、未だ其の妙處に達せざるからの事です

扱て時勢も一定の物では有りませんから、始終活動して居ます、其の活動して進む行くのが、即ち變遷で有ります、此の時勢の變遷に連れて、言語も自然一樣には参りませぬから、隨て和歌にも亦た古風とか、今体とかの差別が、出來て來るのは自然の勢にて、決して免るべからざると存じます、去りながら、我國は外つ國とは違ひ、一種特別の國柄で有りまして、上古より皇統連綿として絶えず、人民も亦た家系を傳へて、繼續すると云ふ始末で有りますから、其の語言が時勢の變遷と共に移動變化したと申した處で、他國の歴史上に、顯はれて居ます様に、大なる異動變化の有るものでは有りませぬ、而るを况んや、人情と云ふものは、邦國の東西遠近を問はず、時代の古今新舊を論せず、同一様のものですから、好し其の間に相違の點が有りますと致した處で、所謂大同小異で有りまして、決して大異動大變化の有るものぢやあ御座いませぬ、其故人情の上に於ては、昔日と今日とで、然ばかりの



差別の、有るものでないと云ふことを斷言致します、是れに由て之を考ふれば、和歌も其の詞と、其の体裁との上に於きましては、異變があつたと致しても、上古にて感慨悲憤の歌と、稱揚せられしものは、今日今人が誦讀致ししても、矢張り感慨悲憤の歌ちやとて稱揚致します、是故に地下に永眠する所の古人にして、若し靈魂有つて、能く人の言を聽分け、能く人の形を見分け、能く物の味を咬分け、能く物の香氣を嗅分け、能く事物に觸れて之を感識するとか、活世界の活人間と同様で有りましたなら、否な同様と假定致しましたなら、試みに今人の傑作で今人の嘆稱して止まざる程の、和歌を古人に讀聞かせたならば、矢張り節を擧て嘆賞するに相違有りません、其の理由はと申すと、其處が即ち古人も、今人も、人情の上にては、相違は有りませぬゆゑ、古人の感慨は即ち、今人の感慨で、今人の喜樂は即ち古人の喜樂で、古今同一轍と申す所以で有ります、今例を擧げ類を引いて申さば、古事記にある倭健命の、御病重く成り給ひしとき、倭國の事を詠給ひし御歌ども、又万葉集なる、日並皇子の殯宮にて、人麿の讀める長歌、及舍人等が讀める、

二十三首の歌などは、之を詠吟する毎に坐に寒冷を覺ゆ皮膚に粟子を生ずる位です、又後世の作にても、後鳥羽天皇の遠島御百首の中なる、御製、或は後醍醐天皇後村上天皇などの御製の中にて感慨ある分は、上古人に聞かせても必ず、其の感情は同様で有らうと存じます、但し是等は其の事實が悲哀の事柄なるがゆゑ、同様の感情を惹起するものなりと、申すものも有らんかなれども、开は畢竟其の淺さを知つて、其の深さを知らざるもの、言たるを免れず、故に是等悲哀の事柄にあらざるも、必ず實地至誠の精神より溢れ出でたる歌なら、皆な其れと同様です、必ず多少の感情を人々に與ふるでせう、是等の外、假令ひ花鳥風月を詠したる歌にても、其の調が高雅で、其の詞が綺麗で、隨て自然風韻も有り、何とも箇とも名稱しがたき、一種異様の趣味を含蓄したるものが有ります、斯の趣味を具へたるものも、亦た時代の新古を論せず、今昔を問はず、善きものは矢張り何時でも善いのです、是等の絶品になると、鬼神をも感泣せしめ、人類をも舞蹈せしめ、國境を超えて千里の先にまで傳はり、時代を経て千萬年の後々まで嘆賞せらるゝものです、今茲に



其の三四を出して言はゞ左の如し

ひむがしの野にかざろひのたつ見えてかへりみすれば月かたふきぬ  
ものゝふの八十うち川のおほる木にいさよふ波のゆくへしらすも  
こゝにありてつくしやいづくしら雲のたなびく雲のかたにしあるらし

以上萬葉集

春霞かすみていにしかりがねは今やなくなるあき霧の上に

われのみやあはれと思はむさうくすなくゆふかけのやまとなでしこ

以上古今集

くれてゆく春の湊はしらねども霞におつるうぢのしばふね

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

しきみつむ山路の露にぬれにけりあかつきおさのすみそりの袖

以上新古今集

ゆふされはうななみかたの沖つ風雲居にふきて千鳥なくなり

信濃なるすがのあら野をとぶ鷺のつばさもたわにふくあらしかな

以上賀茂翁家集

駿臺雜話の中に、倭歌に感興の益ありと云へる條有りて、古歌の勝れたるを出して  
評を加へたり、昔の漢學者は和文をも能く書き、歌をも能く詠たるものなるが、右  
の條に出したる歌どもは、いかにも善き歌どもにて、其の活眼は甚だ感心なること  
と思ふ、其二二をいはゞ

庭の面はまだかわかぬにゆふ立の雲さりげなくすめる月かな

ゆふされば門田の稻葉おどづれてあしのまるやに秋風がふく

津のぐにの難波の春はゆめなれやあしの枯葉に風わたるなり

などは、假令以後世の歌とは申しながら、其の風韻其の感情ども、如何にも尋常一  
様の品ではありませぬゆるゑ、是等の類を、能くく熟讀玩味して見ると、歌の風味  
と云ふものが、自然に分つて來ます、

○歌の沿革



歌が時世と共に、變遷した事を論じたのは、荷田在滿の國歌八論、縣居翁の萬葉考の總論、富士谷成章のかざし抄、村田春海の歌がたりや、尙ほ其他にも人々の著書が有りますが、就中富士谷氏の六運の説が、最も適當のやうに考へますけれども、扱て其の區別の立て方になると、何うでせう、少か愚考なきにしもあらずです、即ち愚見の存する所を以てすれば、六運は六運に相違ないが、假りに左の如く、區別致した方は、穩當かと思はれます、

- 一 上古
- 二 奈良朝
- 三 平安朝
- 四 鎌倉時代
- 五 室町時代
- 六 江戸時代

一上古と云ふは、即ち古事記、日本紀に見えたる歌をも指すにて、神代より以

降、凡そ推古天皇の比に至るまでを云ふのです、此の時代の歌は、古今集序にも、この數も定まらずと云へるが如く、五言の句を、三言や、四言にもいひ、七言の句を、五言や、六言にも、云へるが有りて、隨て其の詞も、大に相違して居る處が有ります、此の時代の中には、神武天皇の御時代と、其れより降て應神仁徳雄略天皇の御世が、歌の盛りで有つたやうに思はれます、  
二奈良朝は即ち文武天皇より、光仁天皇までの間で有るけれども、素よりきはやかに云ふべからねば、其前天智天皇の頃よりを掛けて云ふので、先づ万葉集に見ゆる歌をも指すのです、此の時代となつては、五言や七言の句が、大抵一定して來まして、漸々詞華を弄ぶやうな、風に傾いて來ましたけれども、所謂皆な實地の作で有りました、英邁の氣風が甚だ高い  
三平安朝は即ち桓武天皇以降なれども、歌人歌集の上を以て申すと、所謂六歌仙の人々より、古今集の時代、及後拾遺集の比までを指すのです、此の時代も亦た最初の内は、矢張り皆な實地の作のみで有つたけれども、時運の然らしめし加減にや



漸々奇を求め、巧を競ふの風が起りて、新趣をのみ工夫するが上にも、所謂歌合と云ふ事が始まる、題作と云ふ事も出来た、すると自然に、歌の巧拙善悪を仔細に品評するやうになつて来たから、新趣向を求め、奇巧を闘はすに於ては、知らず識らず、自分の心にも感ぜぬ事まで、借り來り造り出して其の姿を飾るゆゑ、全く一種の技藝の様に成果てました、

四鎌倉時代 は千載集新古今集以下にて、歌人にては、大凡俊成頼政等より、爲家の子の時代までを指すのであります、是に至て、歌の奇工は益す／＼進歩すると同時に、詞華を専らとするの傾きは、益す／＼甚だしく成行いたから、實地の精神は殆んど失へしかと疑ふまでに至りました、時勢の傾向推して知るべきで有ります、然しながら、花鳥風月の詠は、頗る優美閑雅の風に富んで居まして、大に見るべきものが有ります、但是れも漸次に退歩して参りまして、其の末期に至りますと、唯だ先輩の糟粕に、一種奇異の風を加味したと、謂ふ位の處で有りまして、一向面白く有りませぬ、

五室町時代 と申す中にも、南北朝の頃には、其の歌稍や實地に復歸して居ましたから、渠の新葉集や、新續古今集などの歌は、大に力量が有つて、見るべきものも寡からざりしに、是れも亦た時勢の爲めにや、幾くもなくして、全体の文學と共に衰へ果てました、此の時代の歌人は、南朝にて宗良親王、武人にて太田資持、僧侶にて兼好頼阿ぐらゐるのものです、

六江戸時代 も最初の程は、左したる事も無かつたが、元祿の頃より、全体の文學が、隆盛に成つて來て、隨て歌も一大變革を見はしました、并は他にあらず、是れまで退歩して末期に及んだ歌連が、此の時代に其の面目を改めて、上古に遡りて進み駸々乎として止まず、終に天保年間に至ります、其が間には、英雄豪傑とも云ふべき人が澤山出ました、

○歌の學問

歌學と云ふことは、古昔には無論なかつたのですが、後世に至りまして、漸次に詠歌を弄ぶこととなり、隨て其の言語も、亦た雅俗の別が出來りしゆゑ、遂に之を學



ふと云ふ事の必要が起つて來ました、扱て其の始めとも云ふべきは、萬葉集なる、大伴池主の歌の序に「幼年未逕山栴門」とも「山栴歌泉比此如ノ蔑」ともあるは、山邊赤人ど、栴本人磨どを、歌聖として貴べるにて、其當時斯の兩人の歌に勝れたるより、其の風骨を慕ひ學べる事のありしを知るべければ、之を以て歌學と云ふ事の始とすべし、古今集の序に此の兩人を歌聖とも、和歌仙ともいへるは勿論なり、順徳院天皇の八雲御抄に、四家式とて、濱成式、喜撰式、孫姫式、石見女式、と云ふ書のことを記し給へるは、おぼつかなき事なれども、喜撰法師は其の詠歌の一向傳はらざるに、六歌仙の中へ加へたるを思ふにも、或は歌の事につきて、有名なる人なりしかも知り難く、是等の書を正しとすれば、歌學の書の始なるは論なし、次には五家の腦髓とて、公任の新撰髓腦、能因の歌枕、俊賴の無名抄、仲實の綺語抄、清輔の奥儀抄等を載せたまへり、嘗て黒川さんが、和歌所の考にいはれたるが如く、古今集撰定以後、世々に和歌所と云ふものを置かれ、當時の歌人中名望ある人々を、其の任とせられ、歌の巧拙を論定せしめ給へるも、歌學の漸次に其の

形を整へたる氣勢で有ります、既に古今集の序にも、歌の六義の事を申してある、又俳諧体と云ふ部を立てたるなど、皆な詠歌につきて、法則めきたる事を設けたるのであります、此に面白き話があります、其の後に至りまして、源俊賴と藤原基俊との兩人、詠歌上の事に付き、其の優劣を争ふたとか有ります、處が俊成は基俊の門から出た身分なるにも拘はらず、反對の俊賴の歌を賞讃致したとて、他人の咎に遭ふたとか有ります、一体誰彼の差別なく、歌道に巧者な人は何處までも巧者に違ひないし、又善き歌は誰人の歌だとして、何處までも善いには違ひない、然るを反對者だから巧者だと賞讃してはすまない、反對者の歌だから善いと申してはいけなると云ふやうな、究屈な譯は有りますまい、其れに俊成が俊賴の歌を賞讃したからとて、他人の咎を受けたと云ふ一條を以て考へて見ましても、當時相互に盛んに、門戸を主張したと云ふとが推量されます、尋て清輔顯昭などの人々は、歌學の書を著はしました、後鳥羽、土御門、順徳の三帝うち續き、詠歌を好ませ給ひ、又俊成の子に定家があり、定家の子に、爲家ありて、世々其の傳統を以て、ますます歌學は



盛んに成ました、爲家の子に爲氏、爲教、爲相の三人あつて各々其の家を異にし、別立して歌學の家を興すに至り、隨て又徒らに法則秘授などの事を唱へしより、却て詠歌は衰へました、

扱てこの中古の歌學と云ふものに、四病、七病、八病など、唱へて、歌の病と云ふ事をことごとくしく論じ、又九品十体など云ふ類の事は、もとより無稽の愚論にて、採るに足らざることなれども、さすがに詠歌には熱心にして精しきより、尤なる議論もなきにあらざれば、参考には宜しいでせう、今日歌を讀む初學の輩は、一向無頓着にして隨意なるは、更に宜しき事にあらず、少しは是等の書をも讀んで、歌の學問をも爲さねばなりません、尙ほ委しきとは次の詠歌の心得の方にて申しませう、

江戸時代となりまして、一般の文學の進歩と共に、詠歌の事も中古以來の非を看破し、上古の風に基きて之を論ずる人々出來り、隨て歌學に關する論書も、續々世に現はれました、前にも云へし如く、荷田在滿、賀茂眞淵翁、富士谷成章、村田春海

又後に出たる、香川景樹、橘守部など、各自に歌を論じたる書物が有りまして、各々いさゝかづゝ、論旨の違ふ點も有りますけれども、大体は古今に通じたる卓見なれば、必ず是等の書は、通讀翫味すべきことです、

### ○詠の學問

詠の學問は近來漸々發達し來り、諸學校にも國語の科が有ります、國語は只だ歌のみならず、文章にも入用で有ります、兎に角に我が國人にして、我が國語の學は是非に及ばず、修むべき事は勿論ながら、別して詠歌には必要の事です、所謂詞の活用、係り結びなどは、勿論、すべて雅言と云ふものを、博く心得置ずしては、自由に思ふことが云はれない、是等は即ち歌の材料ですから、之を能く知るのが即ち歌の學問の第一です、扱て之を廣く知らうとするには、先づ第一に昔の歌集を多く見て、其の詞の用方を味はふのです、此の歌詞を多く集めたものは、雅言集覽ですけれども、仲々の大部でもあり、又唯だこれを小口から見ても、覺へられませんか、唯だ其の詞に當つた時に見合せては、之を知るの外に御坐いません、そもく



古く歌詞を集めて註釋を施したるは、奥儀抄なれども、中には誤れることもある、今日にては強いて是等の書物に用ゐない、近來の書物にては、富士谷氏のかさし抄、あゆひ抄は至極親切に云へり、又極簡便なるは、鈴木朝の雅言譯解、鈴木重嶺氏の雅言解などが有ります、又心得となるべき事は、祖先宣長の玉あられ、萩原廣道のさよしくれなどです、但しこれらの事は、全く初學の若手の爲めに、一言するのみで、決して大方の識者に向て、申すのぢやありません、扱て中古歌學家にては、歌の末尾に用ゐるべき「つ」、「かな」などの辭をば、容易には使用せしめず、其故に其の許可を得ざる輩は、「つ」、「かな」と云ふべき所をも、餘義なく他の辭にせざるを得ざるの禁ありしは、實に笑ふべき束縛法なれども、是れも亦た其の一理は有ることにて、實に此の「つ」、「かな」など云ふ辭は、随分使ひにくき辭にて、うまく、はまる事は容易にあらざるがゆゑに、初學の間は、濫りに使はしめぬも、無理ならずと云ふべし、但し是れは單り「つ」、「かな」のみに限らず、普通に多き「なりけり」の類も、同様です、香川景樹の歌には、終りに「けるか

な」と云ふ辭を置くことが、最も多しとて、人の評し笑ひたること有り、誰れも一癖は有るものにて、源氏物語に末摘花の姫君の歌には、から衣と云ふ詞が多しとて、源氏君が

から衣、またから衣、からごろも、かへすくも、からごろもなり、

と云ひて笑ひ給ひし事をかきけり、此の「けるかな」と云ふ辭は、嘆息の意にて如何にも良き辭なれども、十分に能くはまらずては、無用の長物となりて、感心せられぬものなり、總べて此の類のてにをを、上手にうまく使ふは、熟練者ならずては能はず、今思出たるまゝに、一つ其例を云はん、

西行法師の歌に

ふりつみし、高嶺のみゆき、とけにけり、清たき川の、水のしらなみ

と云ふ歌があります、此の歌は清瀧川の、水の激流する状を見て、これは定めし水上の山上に、去年以來降積りたりし、雪の解けたのに相違あるまいと、察知したるを云へるにて、三句の「けり」と云ふ辭、實に能くはまうて、感情深きなり、如是使



へば、「けり」の辭も活然として生きて來るし、之れに反して下手に使へば、其の詞死物となるものです、

○詠歌の心得

詠歌の心得と申すとは、前に云へるとどもを、能く翫味して忘れざるにあれども、約る所、歌は風韻を失はずして、餘情の感あるを最第一とすべきやうに存じます、其の事柄に依りては、勇壯にも、優美にも、悲哀にも、快樂にも云ふべけれど、兎に角に其の詞と、其の調とには、能く注意して粗略にせず、無理なる詞つゞけの無きやうにすべし、近來の説に歌も一つの美術なりと申すと有りますが、元來心に思ふことを物に感して、歌ひ出すものなれば、單に之を美術品の中へ加入すべきものぢやありませんまいが、併し既に一首の歌となりて、形を現はしたる以上は、其の美なると、不美なると、巧なると、不巧なると、妙なると、不妙なるとの別は、判然にして其の物の意匠と、風致とに因て、品評し得べきは、美術品と同一で有ります、今之を他の美術品を以て云はんには、繪畫と云ひ、陶器と云ひ、漆器と云ひ、

彫刻品と云ひ、凡そ是等の類、皆な必ず其の意匠と、風致とを尙ふと有つて、唯だ美麗だから、新奇だからと云つて、其れで満足の出來るものでは有りません、況んや其の品の粗悪とか、陳腐とか、或は野卑なる俗氣を帶ぶとか、申すに於ては、尙更らのごとです、尋常一樣の美術品ですら、尙ほ然り、況んや「いはゆる言葉の幸はふ國と云ひ、君子國とも稱せられ來りし、我國の國風として、古來上位に置かれたる歌」なれば、此の品等をして平凡の下位にまで、降らしむると申すとは、返へすくも悔やしき事共なれば、心ある人々は、深く注意有らまほしきと思ひます、素より其の風調体裁の如きは、昔日も彼の人麿、赤人、臆良、金村等各々別ありて、遍照、業平、貫之、躬恒も亦た一ならず、又繪を以て云はんにも、土佐、狩野其他の流派各々風ありて、いづれの風にても、其の妙を得るに至らば、人皆な之を賞揚すべき筈です、詠歌の風は、素より其人に依て好む所あり、得たる所有るものにて、決して流派を以て論すべきものにあらず、是の故に其の勝れたるものになりますと、誰れの耳にも面白く聴ゆ、誰れの心にも深く感應すべきもので有りま



す。

さて前に一寸云へる、中古の歌學の書に云へる事の中にも、採るべき事ある條件は、随分少なからざるが如くなれど、一二今思ひ出たることを云はんには、八雲御抄の中に、用意と云へる條ありて、誠め置き玉へる六箇條あり、

- 第一 近き人の歌の詞をぬすみどる事
- 第二 あらぬやうなる秀句を好む事
- 第三 詞のいりほが
- 第四 風情のいりほが

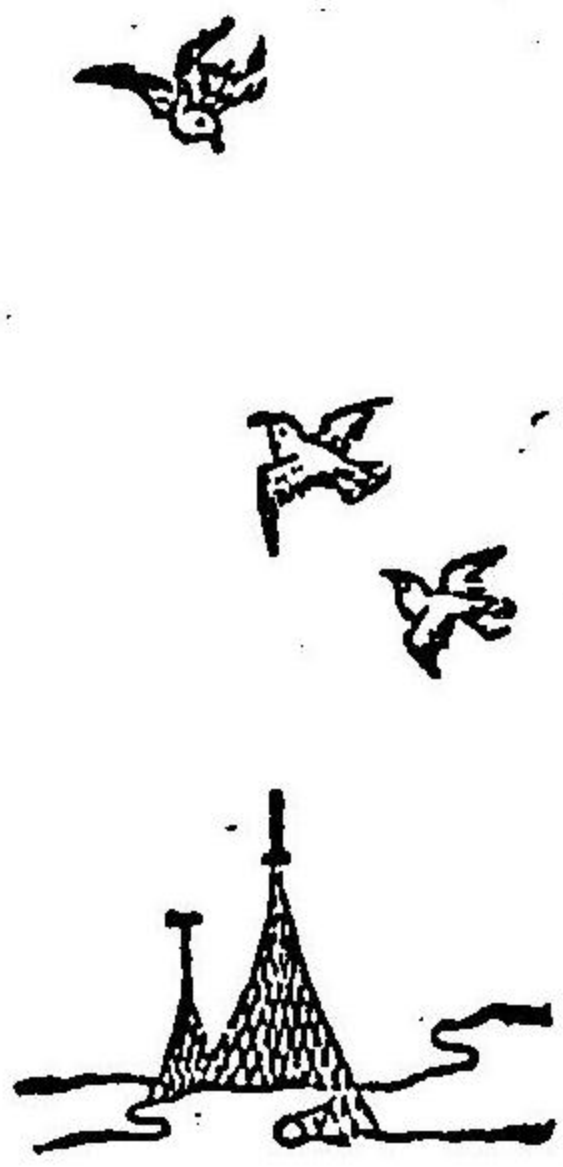
第五第六は之を略す、右の第一條につきて、記し給へる文の中に

かれがうらやましきまゝに、やすくと、わるくとりなして、いひつれば、もとの歌の詞も耳なれ、今の歌も、むげに、きたなく、後代には、いづれか前なりけん、勘へしらざらんには、たゞ誰もよみけることにてあらん云々

と有り、此類のことは、今もよくある事にて、注意すべき事です、第二第三第四の

件は、皆な新奇を好むあまりに、或は卑俗に流れ、或は無理無稽なる歌を讀むを、誠めたまへるので有ります、又袋草子には歌會の式、歌の書法などの類、歌につきたる故實とも云ふべき事どもを載せて有ります、又顯昭の袖中抄や、近世の書にて、長流の新歌林良材集なども、歌につきたる古事、古語の類を註したれば、必ず一讀して心得置く方が得策と考へます、尙此の他にも、今少し云ひたき事あれども、餘り長談となるの嫌が有りますれば、先づ是にて止め置させう、

(明治三十一年十月廿四日談話筆記)





1-365

明治三十三年四月五日印刷  
明治三十二年五月十一日發行

定價金三十五錢



編者 內田鐵三郎

東京市麴町區飯田町三丁目六番地

發行者 吉本襄

東京市牛込區築土前町三十番地

印刷者 平島曠

同市日本橋區上橫町十六番地

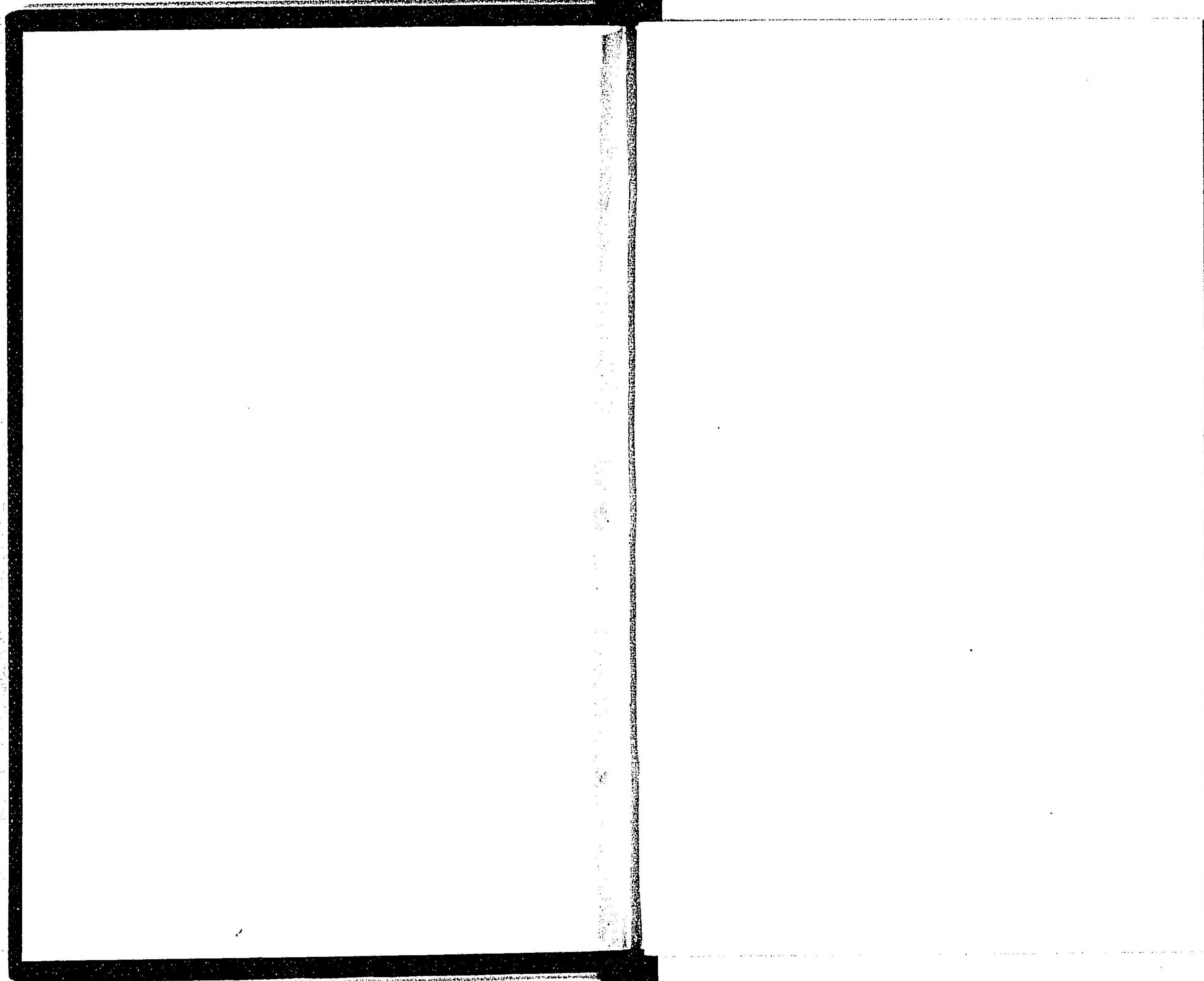
印刷所 八重洲橋活版所

同所

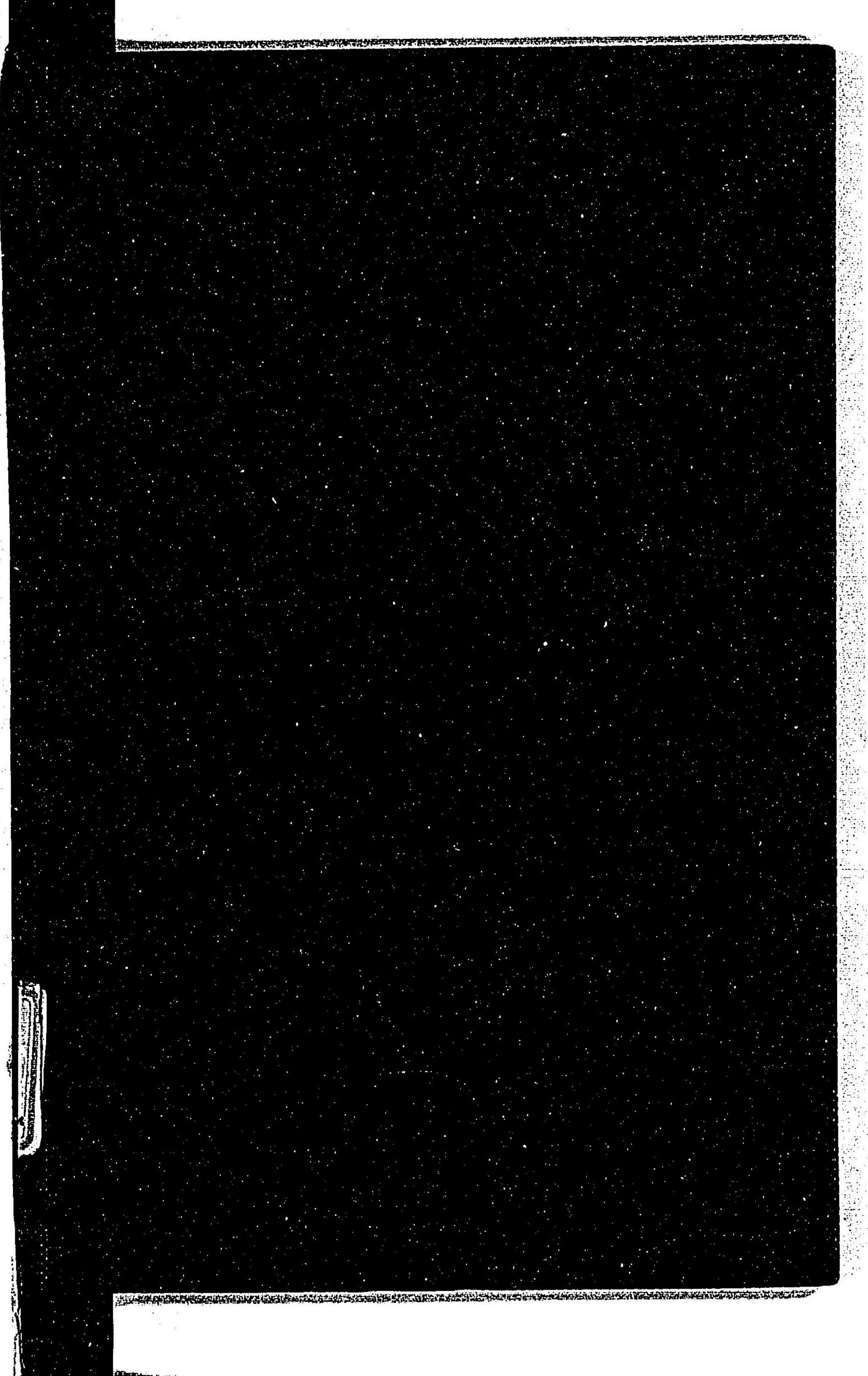
東京市牛込區築土前町三十番地

發行所 鐵華書院











81  
215

084844-000-4

81-215

名家文話

内田 鉄三郎/編

M32

DBA-0192





